

1975

大正十三年二月二十九日第三種郵便物認可  
大正十四年三月一日發行(每月一回一日發行)

永樂町人 編輯



三月號

【號三十七第】

本  
號  
執  
筆  
者

天 下 獨 步 の 壯 觀

優 秀 映 畫 封 切 場

東 亞  
直 營

中  
央

館

(永  
樂  
町)

(電 話 本 局 三 〇 一 四 番)



# 本號執筆者

(大體原稿到着順に依る)

- 大澤 勝 (總督府醫院研究室) ..... 扶餘と奈良 ..... (二)
- 河谷 靜夫 (京城日報營業局長) ..... 社頭 ..... (三)
- 安藤 又三郎 (滿鐵京城鐵道局長) ..... 神社詣で ..... (四)
- 結城 次郎 (仁川吉岡酒造場支配人) ..... 所謂桶流の戦法 ..... (五)
- 淺川 伯教 (鮮展彫刻家) ..... 陶器の味 ..... (六)
- 坪内 孝 (京城第一高女校長) ..... 圍碁と雙六 ..... (八)
- 山本 元光 (土木請負業) ..... 昔の伊勢參宮 ..... (九)
- 伊藤 憲郎 (京城覆審法院判事) ..... 人身取押 ..... (一〇)
- 加藤 松林 (東洋畫家) ..... 桂門會南畫展を觀る ..... (一一)
- 飯泉 幹太 (朝鮮銀行庶務局長) ..... 決戦 ..... (一二)
- 古城 梅溪 (實業家) ..... 詩學古事抄錄 ..... (一三)
- 馬野 精一 (京畿道警察部長) ..... ワシントンの墓に詣で ..... (一四)
- 小瀧 元司 (久原鑛業京城事務所長) ..... 迷信を排したい ..... (一五)
- 白神 壽吉 (京城師範學校主事) ..... 温泉 ..... (一六)
- 市村 毅 (總督府技師) ..... 化石の獨言 ..... (一七)
- 駒田 亥久雄 (總督府地質調査所) ..... 朝鮮の温泉 ..... (一八)
- 田村 直一 (朝鮮警察新聞編輯長) ..... 歸郷雜記 ..... (一九)
- 今村 朝 (李王職庶務課長) ..... 帽子の客 ..... (二〇)
- 松寺 竹雄 (總督府法務局長) ..... 司法偶感 ..... (二二)
- 中島 司 (殖産銀行) ..... 素人漫畫 ..... (二四)
- 木戸 虎藏 (木戸齒科醫院長) ..... スケート ..... (二五)
- 釋尾 東邦 (朝鮮及滿洲社長) ..... 一筆啓上 ..... (二六)
- 中村 健太郎 (朝鮮佛教主幹) ..... 時 ..... (二八)
- 守屋 徳夫 (殖産銀行秘書役) ..... 京城つれづれ草 ..... (三〇)
- 松田 甲 (總督府囑託) ..... 早春賦 ..... (三一)
- 淺岡 信堂 (皇道神靈教主) ..... 靈的研究 ..... (三二)
- 徳野 眞士 (朝鮮鑛業會主事) ..... 兄歸る ..... (三三)
- 三戸 萬象 (東洋畫家) ..... 離祭り ..... (三四)
- 加藤 松林 (東洋畫家) ..... 南鮮にて ..... (三五)
- 志村 春方 (東拓庶務課長) ..... 古筆の鑑賞 ..... (三六)
- 工藤 武城 (京城婦人病院院長) ..... 桂香會の記 ..... (三八)
- 廣江 澤次郎 (在奉天實業家) ..... 東京初のほり ..... (四〇)
- 佐藤 剛藏 (京城醫專教授) ..... 偶感 ..... (四一)
- 伊集院 兼雄 (京城日報社) ..... 縁談 ..... (四二)
- 久保田 經義 (久保田小兒科病院院長) ..... 哈爾濱まで ..... (四三)
- 雜筆書屋主人 ..... 古手紙 ..... (四四)

(其他社友數氏執筆)

本  
虎  
執  
筆  
者

天 下 獨 步 の 壯 觀

優 秀 映 畫 封 切 場

東 亞  
直 營

中 央

館

(永樂町)

(電話本局三〇一四番)





# 本號執筆者

(大體原稿到着順に依る)

- 大澤 勝 (總督府醫院研究室)……………扶餘と奈良……………(二)
- 河谷 靜夫 (京城日報營業局長)……………社頭……………(三)
- 安藤 又三郎 (滿鐵京城鐵道局長)……………神社詣で……………(四)
- 結城 次郎 (仁川吉園酒造場支配人)……………所謂楠流の戦法……………(五)
- 淺川 伯教 (鮮展彫刻家)……………陶器の味……………(六)
- 坪内 孝 (京城第一高女校長)……………圍碁と雙六……………(八)
- 山本 元光 (土木請負業)……………昔の伊勢參宮……………(九)
- 伊藤 憲郎 (京城覆審法院判事)……………人身取押……………(一〇)
- 加藤 松林 (東洋畫家)……………桂門會南畫展を観る……………(一一)
- 飯泉 幹太 (朝鮮銀行庶務局長)……………決戦……………(一二)
- 古城 梅溪 (實業家)……………詩學古事抄錄……………(一三)
- 馬野 精一 (京畿道警察部長)……………ワシントンの墓に詣で……………(一四)
- 小瀧 元司 (久原鑛業京城事務所長)……………迷信を排したい……………(一五)
- 白神 壽吉 (京城師範學校主事)……………温泉……………(一六)
- 市村 毅 (總督府技師)……………化石の獨言……………(一七)
- 駒田 亥久雄 (總督府地質調査所)……………朝鮮の温泉……………(一八)
- 田村 直一 (朝鮮警察新聞編輯長)……………歸郷雜記……………(一九)
- 今村 鞆 (李王職庶務課長)……………帽子の客……………(二〇)
- 松寺 竹雄 (總督府法務局長)……………司法偶感……………(二一)
- 中島 司 (殖産銀行)……………素人漫畫……………(二四)
- 木戸 虎藏 (木戸齒科醫院長)……………スケート……………(二五)
- 釋尾 東邦 (朝鮮及滿洲社長)……………一筆啓上……………(二六)
- 中村 健太郎 (朝鮮佛教主幹)……………時……………(二八)
- 守屋 徳夫 (殖産銀行秘書長)……………京城つれづれ草……………(三〇)
- 松田 甲 (總督府囑託)……………早春賦……………(三一)
- 淺岡 信堂 (皇道神靈教主)……………靈的研究……………(三二)
- 徳野 眞士 (朝鮮鑛業會主事)……………兄歸る……………(三三)
- 三戸 萬象 (東洋畫家)……………離祭り……………(三四)
- 加藤 松林 (東洋畫家)……………南鮮にて……………(三五)
- 志村 春方 (東拓庶務課長)……………古筆の鑑賞……………(三六)
- 工藤 武城 (京城婦人病院長)……………桂香會の記……………(三八)
- 廣江 澤次郎 (在奉天實業家)……………東京初のぼり……………(四〇)
- 佐藤 剛藏 (京城醫事教授)……………偶感……………(四一)
- 伊集院 兼雄 (京城日報社)……………縁談……………(四二)
- 久保田 經義 (久保田小兒科病院長)……………哈爾濱まで……………(四三)
- 雜筆書屋主人……………古手紙……………(四四)

(其他社友數氏執筆)

# 扶餘と奈良

總督府醫院  
研究室

大 澤 勝

平濟塔は扶餘の街はづれに立つ一基の小塔である、此塔の由來を述べると、先づザツとした所はかうである。

百濟が扶餘に都する事五世百四十六年に及んで居たが、三十一代目の義慈王の世に至つて王が餘り懶巧ではなかつた爲に國政が亂れ新羅其隙に乗じて起ち唐兵を合して之を討つた、其時の主動者は唐將蘇定方で弊政の餘殃で百濟の軍連りに破れて都は終に陥落の悲運に會し、王は遠く唐に走り是に於て百濟の祀りは全く絶えた、一方百濟征服に成功した蘇定方は意氣大に揚つて一番己の功業を後世に傳へようと思つて自分の功績を録して建てたのが此塔である。元來當時日本の半島に於ける勢力の消長は百濟の盛衰興亡によつて左右せられて居たので百濟の覆滅は同時に日本勢力の覆滅であつた、だから此塔は一面から見るに日本勢力の朝鮮半島から跡を絶つた紀念碑とも見られる。

余輩の述べようとするのは此塔の形式と其美術史的の價値とである、但し例によつて冒者象を讀するの識は余の甘受する所である。

塔と云ふ物は發達の因縁から見ると、中々古く矢張り源を印度に發して居る、塔と云ふ言葉は卒塔婆から起つて居る、今は兩者全然別箇の物として取扱はれて居る事

は申す迄もない、バゴードと云つたのが卒塔婆の始りで中に死體の納まつた物を稱したか、後は單に禮拜の目的物として死體を入れない卒塔婆になつた物と云はれて居る、勿論形も今日見る様な堂々たる物ではなく極めて原始的な物で半球形をなして居つて唯それに僅かな變化のある位が關の山であつた（之は現在残つて居る佛跡鹿野苑の卒塔婆について見ても明らかである、尤も勿論私が實見したわけではなく寫眞を見たばかりではあるが）現に見るが如き塔の形は支那で發達した物と考へられて居る、それが他の佛教藝術と共に朝鮮半島を通じて日本に渡來したものである。

塔は今迄申述べた所で明かな様に禮拜の中心を形作つて居る、だからそれだけに佛寺建築の中心をなすもので従つて佛寺建築をするに當つて塔を論ずる事は極めて重要であり且つ面白い物である。

前置きはこれ位にしてさて本論の平濟塔であるが、元來此塔は蘇將軍が自己の戰績を誇らんが爲に建てた物であるからして塔本來の目的によつて建てられた物でない事は云ふ迄もない、云はゞ一種の紀念碑に塔の形をかつて作つたままの事である、しかし目的は如何であらうとも形は立派な塔である、建てられた年代から考へると義慈

王の滅びた時であるから略吾國の白鳳の時期に當つて居る様である形式は多層塔の中五重に屬して居る、用材は石である、吾國の此塔と前後して出來た物で現存して居る物は四つある、年代から云ふと法隆寺の物が稍以前らしく法興寺及法輪寺の物が之は後に申述べるが最も近い物らしく藥師寺の東塔に至つては稍年代が降る物ではなからうかと思はれる。自分が見て最も著しい相似を平濟塔に對して示して居るのは以上の四塔の中法興寺の三重の塔である。兩者共に哀階の廂のカーズは如何にも穩かな感じを與へる極めて弱い殆ど直線に近い綫の「反り」から出來て居て兩端に行つて短く且急峻な「撥ね上り」を見せて平穩に伴ふ綫の「單調さ」に快い變化を與へて居る。異なる點は平濟塔の五重なるに對して法興寺の三重なる點である此點ではむしろ法興寺の塔に似て居るが綫の使い方に相違がある様に思はれる、即ち法隆寺の物では綫が稍鋭い彎曲を示して居て従つて綫の與へる感じはいくらか固いそこへ行くと法輪寺の方は兩者の間に位する物かも知れないが此塔は最上層が最もいやな徳川後代の補修によつて無慘にも改造せられて木に竹をついだ様になつて終つて折角の飛鳥三塔の一は、たいなしになつて居る、だから此方は一寸比較をする氣にもなれない、藥師寺の物も中々よく似て居るが矢張り一番近い氣がするのは法興寺のそれである、しかし尙仔細に觀察をすると見逃す事の出來ない相違が潜んで居る、九輪の違つて居るのはこれは一目見れば判る事だかもつと大きな違ひは柱の形式である、當時の建築には近頃の「ルネ

別箇の物として取扱はれて居る事

建てられた年代から考へると義慈

る、當時の建築には近頃の『ルネ

ッサンス』手法に見るが如き柱に丸味があつてそれが本及末に至つて稍細くなる、所謂『エンタシス』を有するのを特徴とする、大和に散在する當時の諸多の建築には皆それを具へて居て明に當時の特色を語つて居る、勿論前に擧げた四塔の隅の柱には明かな『エンタシス』を有する、所が平濟塔に至つては自分はかなりよく見た積でけあつたが何處にも其跡を見出す事も出来なかつた、一語此『エンタシス』は『ルネッサンス』の示すその如く矢張り其源を遠くギリシアに發して居る、従つて建築の考古資料としては重要な一要素をなして居るものである、だから之れないと云ふ事は奈良現存の諸塔と此塔との間に存する非常に大なる差違である、手法の厳格な當時にあつて之だけの大きな違ひの出来たのは注目し得る事實であると思ふ。其理由に至つては淺學予輩等の論すべき限りではない考古學者の研究に待つべき問題であつて、予輩は唯隠れたる一事實として提唱するばかりである。

塔の美術史上に占むべき地位は重大である、前々號に申述べた佛像と共に朝鮮は申す迄もなく又日本の上代美術史を研究する者に取つても逸するべからざる資料である。

尙此塔は懷素の書を有する事に於て三重の意義を生じて居る、此點では恰も奈良藥師寺の東塔が塔其物としては白鳳期製作の唯一の遺物であり同時に水煙に舍人親王の鑿銘のある事によつて歴史上重要な意義を喚起して居るのと其趣を一にして居る。

此塔はかう云ふ考古的立場をばなれて單なる觀賞の對照として見

ても實にいゝ一體建築と云ふ物は空間藝術の中の特殊の地位を占むべき物で同じ『カテゴリー』に屬する繪畫、彫刻は實に此中にはくくまれて居る、だから建築が見線によると空間藝術の中心とも云はれる法隆寺が残つて居、法起寺もあるので飛鳥時代の藝術を今日に於て尙云々する事も出来る、即ちそれと同じ意味で考へれば此小塔の占むべき美術史上及文化史上の地歩の如何に重大であるかは自らわかる事と思ふ。

も調和に於て破れる所があつたんでは其價値は半減せられるわけである、初夏の麥の浪のさゝやかな搖ぎの中に生駒山を負ふ藥師寺の東塔を仰いだ時には如何なる人と雖も何とも云へない一種の感じに打たれるだらう、美しいと云ふよりも渾然たる融合の感じである、平濟塔が今立ちつゝある所は千年の昔如何なる風物を有して居つたかは知る由もないが、現在其周圍の調和の感じは如何にもいゝ、大陸の鮮かに且寂しい晩秋の日を浴びた印象は今も尙はつきりと私の眸底にうかんで居る。

社 頭

京城日報社 河 谷 靜 夫

時——大正乙丑正月四日

正午頃

所——官幣大社宇佐神宮

境内

私は今、轟々天を摩する

老杉と鬱蒼陽を遮ぎつてゐる

椎の大樹が交錯して被ひ

かぶさつた石を轟んだ坂道

を最も遅れて、マンントの裾

をからげヨチ／＼として一

行を貫入つて居ます。但し

其眼は歡喜にうるみ、口邊

愉悅の漂ふのが窺はれる。

此春金婚式を擧げると云

ふ父と母とが、下駄ばきの

儘で、壯者が担道を歩する如き健かささであるに、私の長男長女が靴音高く其間を踏響喜戯してゐる活圖を見せて呉れるのである。

末社若宮を右曲して三の鳥居前で此老幼二組、振り返つて私をまつ、長女は手を叩いて私を迎ひに來る、

壯年三十九、五尺三寸、而して十九貫入の私が最も歩行に不成績である事を無上の欣快事とするのである。

父七十三母七十一と初詣で。

神社詣で

京城鐵道局 安藤 又三郎

年末年始の休暇を利用し、中學三年の長男、女學校二年一年の長女次女を通れ、九州一周を思立ち暮の二十八日に京城を出發した。子供三人共別府迄連れ行きたる。とあるも、幼少の頃に於て殆ど記憶にない、今回は九州の地理歴史の實地見學と言ふつもり、自分は引率の先生格、二十九日朝下關に上陸赤間宮、安德帝の阿彌陀峰御陵平氏の墓に参り檀の浦を見、海峽を渡りて門司より乗車小倉、戸畑枝光、八幡等の煤煙に滿つる工場地帯を車窓より眺め、香椎に下車香椎神宮に参詣、多々羅濱を過ぎ敵國降伏の崇嚴なる額ある鳥居をくゞり、箱崎八幡を拜し千代の松原に龜山上皇、日蓮上人の銅像を見、博多の町を經て九水電車にて二日市に行き、天満宮に参詣の後武藏温泉に投宿した。三十日は山陽の筑後川の詩を聞かせつゝ其鐵橋を過ぎ、久留米は素通りして車窓より楠木、田原坂等西南戦争の激戦地を眺め、熊本に著き、熊本城に上り、市中を展望、本妙寺、加藤神社を經て水の公園水前寺に遊んだ。卅一日汽車は球磨川の急流に沿ふて走り、人吉にて川と分れてからは矢岳の急勾配ループ線にて肥薩國境の高地を過ぎ、櫻島の聳へる鹿兒島灣を眺めたる時は快觀に打たれた。鹿兒島に著後

直ちに大久保甲東、西郷南洲、乃

木夫人の屋敷跡、昭國神社、島津齊彬公等の銅像を拜し、九州第一のデパートメントストア山形屋を見た。越えて元日朝モーターボートにて櫻島に渡り、大正三年噴火した時の遭難者より噴火の模様を聞き、溶岩の一面に固まり居る慘狀を見て引き返し、島津公別莊磯邸前にてボートを棄て邸内を見た。元日の麗らかな朝掃き清めた磯邸より櫻島を眺めた景色は何とも云へぬ気分であつた。集成館の鹿兒島博物館を見、南州、桐野、篠原等の墓地、南州終焉の地南州洞窟を見て城山に上り、市中を展觀下りて城址にある造士館をも見た。二日鹿兒島發國分にて降り鹿

世間はなし

平田 久雄

◎京畿道警務課長の關口さん、若手の敏腕家として内外の評判頗る宜い。處で、氏が高等學校時代『名金』といふアメリカ出來の映畫が大流行、滿都の學生が悉くそれに引きつけられた。ゴ多分に漏れず關口さんもその名金狂、今日は淺草、明日は神樂坂と、しきつと名金のあとを趨つた、少しも學校の本などは讀む風がない、で、或る先輩が心配して、學校の成績はどうかなと聞合せて見ると、いつも二三席を下つたことがない『實

〔 8 〕

兒島神宮に参詣し、高千穂峰の麓にある霧島神宮を拜し、自動車にて都城に出で、宮崎に著きたるは夜十時頃となつた。三日は宮崎の南十里にある鶴戸神宮に参り、歸途熱帯植物にて有名なる青島に寄り歸りて宮崎神宮に参拜した。四日別府に著き三泊、其間入湯中の住井三井物産支店長の紹介にて大分の長野家藏幅竹田、草坪、杏雨直入等九州南畫の逸品、山陽、雲華、大雅堂等の書畫に眼福を恣にした。七日宇佐神宮に参詣、同夜航便に乗り八日夜京城に歸著した前後十二日間の九州一巡——宗像神宮阿蘇神宮を除き、九州官國幣大社中社全部に参詣し子供等に敬神を念を起さしめ、地理歴史、商工業、氣候風土の一般を見せしめ此旅行の目的を達することを得た夏は子供の學校は休暇なるも、自身には休暇が無い。年末年始こそ子供づれの旅行を爲すときと思ひ立つたが、京城にて年賀客の應接に日を暮らすよりは餘程愉快であつた。

に不思議だ、あの男ちつとも本を讀まないのに……』  
◎青々園茶舗のあるじ達が發起で京城に模範的茶室が作られ、被布連や、あかさの杖が寄つて『先づ一服』を試みるの噂、それも宜からう、氣の短い日本人は確に『先づ二服』の修養肝甚。  
◎京日の俳仙連が寄つて『子の日會』といふ句會を作つて居る、最初は怪句百出で、師匠も匙を投げたが、この頃では『少し見込がある』との噂、尤もこの間の會に河谷氏が互選一等となつたが、あれなどはヘンな句だと、賞品を買つて河谷氏散々ロキおろされて居る

しこんな際どい戦法は度々使へる



所謂楠流の兵法

仁川吉岡酒造場

結 城 次 郎

昔楠正成が赤坂や千早の城に立て籠つたとき、あらゆる秘術を盡し寡兵を用ひてよく敵の大軍を惱ましたことが傳へられてゐるが、

私は少年時代によく『現代のやうな進歩した時代から觀れば驚人形やイカサマの土癖など造つて敵の眼を誑かすなどは幼稚の極で全く一つの語り草に過ぎないだらう』などと思つた事があつた。處が驚くべし過般の歐洲大戰では所謂楠流の兵法が敵味方共に盛んに使はれてウツカリすると酷い目に遇はされた——現代科學の恐ろしい進歩の反面にこんな原始的な惡戯が行はれた——そこが面白いではないか。

陸戦の方面では主として敵飛行機の眼を晦ます爲に重砲とか火藥庫とか重油タンクとか其他重要な建築物の屋根などに擬塗法を用ひたのは周知の事實である、海戦の方面ではもつと面白い事があつた。印度洋の貿易破壊に大成功を収めた二本煙突の獨艦エムデンが擬ひの煙突を一本増し四本煙突で大手を振つて歩いたのは有名な話である。

ジュネットランド海戦以後は全く對潜水艦戦となつたので所謂楠流の戦法も主として獨逸潜水艦に對して用ひられ又敵の潜水艦が盛んに之を用ひた。

白晝潜水艦が帆を張り之に中立國の國旗を懸し漁船と化けて商船に近づき魚雷を發射して之を沈めたなんて云ふのがあつた。

獨軍がそう出るならばといふので今度は四船といふのが案出された、これは二三百噸位の漁船に大砲や魚雷發射管などを裝備し、スツカリ砲門を隠し外から見ると全くの漁船にしか見えない之に勇敢な英兵が乗り込み然かも皆漁師の風を装ひ瑞典とか諾威とか云ふ小弱國の國旗を掲揚してフラ／＼と海上を歩いてゐる。こうなると國際公法もヘチマもない、勝てば官軍だ、正義一點張りでも負けたが最後之助だ。

獨潜の船長遙かに潛望鏡によつてこの怪しの漁船を望見したが武器のない高の知れた漁師共だと侮り浮き上つて之に近づく、四船の方では故らに驚き狼狽したかの如き様子を見せる、兩船の距離益々近づいて四船の有効射程内に入るや沈著なる四船の船長は號令一下電鈕を押せば砲門が開かれ砲彈魚雷が飛び出すいつの間にか中立國の國旗は英國の軍艦旗と代り老ぼれ漁師と思つたのは不敵の面魂を失した英兵である、これには流石の獨逸潜水艦も少なからぬ損害を蒙つた、水中に潜つてこそ威力があるが水面に浮び出たら河童が陸に上つたのも同然意氣地がない。然

しこんな際どい戦法は度々使へるものぢやない、我が常陸丸を印度洋中で沈めた獨逸武裝商船ワルフが北海の哨戒線を突破して印度洋に暴れ出たのも正にこの筆法を用ひて居る。

潜水艦は軍艦や驅逐艦に乗り切られると一と溜りもなく沈没する現に一昨年夏佐世保港外で四十三潜水艦が輕巡洋艦に乘切られて沈没し乗員は悲惨な最後を遂げた。であるから驅逐艦などは優速を利用して敵の潛望鏡を見付け次第之に近づき乗切らうとする、獨軍何ぞ之を知らざらんや今度は擬潛望鏡といふものを造つて海上に放置した、それは恰も潛望鏡に似せて造つた木の棒の下にコルク板の浮きを著け更に其下方には機雷がつけてある軍艦でも驅逐艦でも之に乗りかけたが最後爆破されて了ふ

商船は盛んに擬塗法を行つた、擬塗法といふのは潜水艦乗員の眼に錯覚を起させるために船體を赤青、黄、白、黒等様々の色彩で奇想天外的の雲狀模様で塗り立てるのである、潜水艦から攻撃するに好都合な朝夕海上の薄暗い時などには一寸潛望鏡で覗いた位では針路や速力が判り兼ねるのでつい攻撃の機會を外すといふ事になるのである。

尙戰役終期頃には船艦の見分けがつかない護送船が案出された、これは船の前後全く同じ様に擬塗され又造ることの出來ぬものなどは畫がかいてある、例へば錨の如き繩にもつけがあるのかと思ひよく見れば描いてあるから面白い。つまり敵潜水艦の眼を晦まして針路や速力を覺られない爲である。



# 陶器の味

鮮麗彫明家 浅川伯教

陶器の味は飯の味の様なものだ  
口で説明する事は出来ぬが、食へ  
て見るとよく知れる。そして同じ  
白磁と云はれるものでも、其味は  
千變萬化だ。只白いでは済まぬ。  
丁度飯に三百六十五日其加減の相  
異がある様のものだ。支那人は之  
れをよく心得て居つて只白と云ふ  
ものでも随分色々に区分して居る  
粉白、乳白、雪白、灰白と云ふた  
様の言を用ひて居る。併し言で云  
へる處はまだ口元であつて、味は  
その奥だ。

古いよい白磁と、今頃の下等の  
白磁を比較して見ると、土釜にふ  
つくり煮た一等米と鐵壺鍋で煮た  
南京米との相異がある。

飯に赤飯、麥飯、粟飯、小豆飯  
半搗米、五目飯と色々區別がある  
様に、陶器にも様々の種類がある  
それが又皆異つた味を持つて居る  
米を釜に入れて火でたいしたもの  
が飯で、土を窯に入れて火で焚い  
たものが陶器だ。飯は舌が味を感  
ずるが、陶器は眼が味を感じる。

人間の味もよく飯に似て居る、  
半煮の飯の様の人もある。麥飯  
の様な人もある。一方を煮えきら  
ぬ人と云ひ、一方を一寸見た外觀  
は悪いが長くつきあつて味の出で  
来る人と云ふ。鐵壺鍋の南京米は  
近代式の鼻につく人を思ひ出す。

支那人の中には陶器の味をよく  
知つた人があつて、常に宋あたり  
の陶器の破片を懐中にして、時々  
出しては見て獨り喜んで居る。之  
れは全く利益を離れて、眞に眼が  
その味を樂しむ入である。

白磁傳靜夜と云ふ語があるが、  
よい白磁が靜かな夜を象徴して居  
ると云ふ見方は實に感服する。  
世の中のごたくに疲れ切つた  
時李朝の白磁などを見ると心がす  
が／＼して來て、靜かな夜の休息  
と同じ氣持ちに打たれる。

昔の武士が陣中で茶を立てたり  
よい茶碗を所持して、之れに一服  
薄茶を明日をも知らぬ身で、心靜  
かに松の下などで味ふ、其氣持は  
今の人にも必要だと思ふ。

これは價格の問題ではない、高  
いものにも佳いものがあるが、安  
價で佳いものは尙妙だ。東海道の  
停車場などで賣る、番茶の土瓶に  
も中々よいものがある。捨てずに家  
に持つて來て使つたらと時々思ふ  
酒井家の入札に三井家で買つた、  
文淋の茶壺は二十四萬圓だそうだ  
高いものだが中々佳いものらしい  
元々豊公が北野大茶會に用ひられ  
たもので、北野文淋と云はれて大  
坂落城後三井家の手に入つて居つ

たものらしい。それを酒井公が京  
都の所司代であつた時、或る事の  
爲めに三井家から交換問題と云ふ  
形で譲受けて居つたのが、酒井家  
の家寶と成つて居つたものだと言  
ふ事だ。それが又元の鞘に納つた  
次第、こんな茶壺も元を調べると  
支那の樂味入が出世した物らしい  
李朝の水滴は五十錢か八十錢だ  
が、それにはそれで又佳い處があ  
る。別の味を持つて居る。錢のあ  
る人は澤山金を出すが宜しく、貧  
乏人は少しの金で樂しむが宜しい

◆湯村さん 吉田莊一

殖産局土地改良課長の湯村さん  
は、京城でも唯一といつて宜い  
位の、浮世繪の所藏者だらう、  
ズイ分り／＼のものを蒐集し  
てゐる、そして亦斯道の精通者  
で、説の傾聴す可きものが多い  
この間も殖銀の深尾さんなど、  
半日の閑を利用して見學に行つ  
たらしいが、今に目にちらづく  
やうなものがあると 悉く感服  
に及んで居る。

いそがしい世の中でそんな暇はな  
いと云ふ人があるなら、いそがし  
いから尙必要だと云ひたくなる。  
李朝の白磁の光りは、實に温か  
い柔かな光だ。之れは永遠の象徴  
で、春の暁夜の月を思はせる。支  
那の青磁の壺は澄みきつた秋の月  
を思はせる。  
反響によつて永遠の響を發する  
梵鐘は耳の感ずる味であるが、そ  
れと同じ感じを眼が感ずる場合が  
ある。それは古いよい甞を眼の前  
にした時である。

い。妻君は奇麗の著物の事、顔に  
白粉をつける事、主人は宴會の事  
に投げる、豊かな婦は益々喜んで

○ 一年三百六十五日一生五十年の間、陶器を手にしない事は少い。飯を食ふ時、茶を呑む時、それ等が其時代の好みによつて形が移り變る。

○ 一般の趣味が高ければ氣持ちのよいものが出来るし、低ければ悪いものが出来る。只腹に入ればよいと云ふのみでは濟まぬ。眼に氣持ちよく食べると云ふ事は必要の事である。

○ 金錢を掛けずに楽しむ楽しみが眞の楽しみである。反對に金錢が無ければ楽しむ事を知らぬ人があつる。そう云ふ人が金を失ふた時のみじめさはその人の生活を全く無に歸してしまふ。人の顔の批評のみするうぬぼれ女の鼻が落ちたみじめさと好一對だ。

○ 朝鮮の茶碗の美しさを眞に見出したものは、日本の初期の茶人だ使用しなくも宜しい。只見る丈けでも立派の立體藝術だ。内の氣持外面の氣持、高臺の強さ、實に盡いよいものだ。古い井戸などの茶碗は宋元の畫を思はせる。

○ 轉體の上で陶土が人間の手によつて、形を創造されて行く有様を見る程氣持ちのよいものはない。神様が人間を創造する時の有様に最も似たものだと思ふ。むくくと土が力強く形に成つて行く、その内に女の胴體の様な大きな壺が出来上る。

○ 仕事を樂しむ事、作る事を樂しむ事。これが近代人には缺けて居る。餘り金を欲しかり過ぎる。そのくせ之れを使用する事を知らな

い。妻は奇麗の著物の事、顔に白粉をつける事、主人は宴會の事こんな事で頭が一ぱい。下のものはぶつ／＼不平で時間をつぶす、眞面目に働きたい人が仕事を失ふ一つの世でも様の下の力もちが必要だ。陰で苦勞する人、多數の爲めに、眞に心配する人、所謂味のある人が大切だ。よい陶器の味の様な味を持つた人が澤山出て來れば世の中は幸福に近よる。

○ 陶器の下の等とか上品とか云ふ事を履きがちがへてはいけない。奇麗のものに下の等のものも多く。素朴のものに上品のものが多い。人間でも同じ事だ、下等上品を職業や位置で相場付けをしてはいけない。やつぱり味で見る方が眞に近い。

### 美屋飛會

○ 高木利經 さぐりぬし眞玉は悲し指先にふるゝ忽ちあらすなりつる  
とめて來し光は消えて數陰のあらぬかたよりもゝ燈ともしび

○ 松寺桂陵 木のめなる釜に松風かよひ來て心しづかに語る夜すがら  
黒雲はたゞ峯のみと思ひしにはや一村のしくれけるかな

○ 橋本桂堂 桐の葉の落ちて淋しき庭の面に月影白く見ゆる茶の花  
大海の舟路はるげくゆく旅は島かと見ゆる雲の峰かも

○ 工藤ゆり子 宇治ならぬ片山里の茶畑に一人きびしく茶を摘める人  
栗の實のはしけて落つる音ならむ秋の深山のしよま破るは

○ 橋本桂英

○ 小林桂月 うなる子は竿にかゝれる大沙魚を取道さじと立ち騒ぐ見ゆしづの女が節面白くうたひつゝつ茶の國の富やかさねて

○ 大島澄子 空と水みどりの中に糸をたれ家路わすれて沙魚をつりけり  
よしあしの眼にうつる折々にこゝろの波もたちさわぐかな

○ 小林久子 爐をかこむ人は年々老いゆけど昔ながらの茶の風味かな  
ちりばめし玉の光とおもふま

○ 山田花江 鱗雲みなぎり渡る夕つ方そらにからすの群れて飛ぶかな  
葉蔭も朝の日さしに栗拾ふ少女のほゝの紅さしにける

近代式の鼻につく人を思ひ出す。

坂落城後三井家の手に入つて居つ

にした時である。

# 圍碁と雙六

京城第一高女校長 坪 内 孝

遊戯は大別して、二種とするこ  
とが出来やう。即ち室内遊戯と戸  
外遊戯の二種である。

戶外遊戯の中で最も古くから行  
はれて居たものは蹴鞠であらう。  
文獻の上でも中大兄皇子と藤原鎌  
足とに關する蹴鞠の史話は有名な  
史實である。

武家時代に至つては武術に關す  
る戶外遊戯が頻出した。即ち卷狩  
を始めとして、犬追物、流騎馬、  
等懸等凡て武術を主した戶外遊戯  
である。

室内遊戯として古いものは雙六  
であらう。持統天皇の御代に雙六  
を嚴禁せられた事が日本書記に記  
されて居る。史實を見ても、餘程  
早くから行はれたものと云つてよ  
からう。

圍碁は淳和天皇の頃(天長年間  
)天皇が群臣に酒を賜はつて圍碁  
の技を争はしめられたことが日本  
書記に見えて居るから雙六と相前  
後して傳つたものであらう。

將棋は鎌倉時代頃が興ぜられ  
たものらしい。この三つの遊戯は  
後世三面と稱せられて多くの人士  
の娛樂物となるに至つた。

この外に室内生活にのみ耽つた  
平安朝時代には、種々の室内遊戯  
が發達して居る。或は繪合と云ひ  
歌合と云ひ、貝合せ、香合せ、根  
合せなどが盛に行はれた。これ等  
の遊戯は極めて上品で而も趣味の

深いものであつたが、後世には餘  
り傳らなかつた。近時風流者間  
には聞香を復興して楽しんで居るも  
のがある。

今茲に文獻にあらはれた雙六及  
圍碁に就て述べて見よう。

萬葉集十六卷に長忌寸意吉磨の  
歌に

ひとつたのめのみにあらず五つ  
六つ三つ四つさへありすころく  
のさえ

と云ふのがある。水鏡には光仁  
天皇が其后と雙六を弄ばれた事を  
叙して居る。大鏡には元方民部卿  
が藤原師輔(冷泉、圓融天皇の母  
后の父)と雙六を弄んだのが因を  
なして、民部卿は遂に憂鬱症とな  
つて斃せられたと説いて居る。又  
同書には御堂關白清長と伊周公と  
が雙六を興ぜられた事を説いて居る

武家時代には戶外遊戯を重んじ  
た結果雙六も多く弄ばれなかつた  
やうであるが、徳川時代に至つて  
雙六は形を變じて、一枚の紙上に  
繪模様を描き、采を用いて勝敗を  
決をするやうになつた。これが今  
日行はれて居る雙六の起原をなし  
たもので、所謂道中雙六、出世雙  
六である。

圍碁は古く支那から傳つた遊戯  
で、前述のやうに天長年間朝廷で  
群臣をして行はしめられたのを始  
めとして、多く上流貴紳の間に弄  
ばれた事が文獻に散見して居る。

【 八 】

源氏物語帚木の卷には空蟬の君と  
軒端秋の君が碁を圍まれた事が記  
されて居る。

將棋は後世、野狐盤とさへ稱へ  
られて居る。これは將棋に耽溺す  
るの弊から名けたものと云つてよ  
からう。併し雙六、圍碁何れも上  
古は賭事の具とされて居る。この  
故を以て雙六の如きは度々これを  
禁制せられて居る史實がある。

現今では上古より用ひられた雙  
六なるものは殆んど廢絶して、そ  
の用途さへ知らぬものが多くなつ  
て居るが、圍碁、將棋は上下通じ  
て人士の間に弄ばれて居る。而し  
て圍碁は上流に將棋は下流にと云  
ふ觀念もあるやうである。この觀  
念は蓋し階級制度の喧しかつた武  
家時代の偏見から起つたものでは  
あるまいか。

更らに武家時代には圍碁は男子  
雙六は女子の専用物と目された形  
跡があるが、平安朝以前には區別  
はなかつたものらしい。

## ◆香椎氏の事

吉田 莊一

釜山の香椎源太郎氏、年々七十萬  
圓ら身代がのびるとの評がある  
▲道樂は書畫、刀劍、盆栽で、こ  
の三つに十數萬圓(年額)は捨て  
るとの話▲で、客あり氏を訪ふと  
『イヨ、これはお珍らしい』先づ  
御馳走して、次が刀劍、書畫の披  
展▲かうなると見るもの悉く辭を  
一にして『イヤ之はお美事』『こ  
れはお立派』『先づ國寶級』な  
どと推讃感激するので、氏の蒐集  
慾は益々昂進▲お蔭で釜山の道具  
屋は不景氣知らず▲尤も香椎氏の  
盆栽だけはカケ値なしに立派なも  
のださうな。

道中の宿料は大體一泊が十二錢で  
あり、中食が五錢と人力車が一里



の遊戯は極めて上品で而も趣味の、  
ばれた事が文獻に散見して居る。

のなさうな。

## 昔の伊勢参宮

京城和泉町  
土木請負業  
山本元光

今より四十年前即ち明治十二年に私が十六歳の時に村の若者十一人連れにて伊勢参宮をした。其當時と今日と比較すると纏てか今昔の感に堪へず、先夜御隣りの松本さんに懐舊談をした處、それは面白い是非書いて見よとの仰せ、なれども何分十六歳の時にて見聞茫漠、殆ど詳しいことは覚えて居ない、が當時一番珍しかつたことや驚いたことを今より考へて見ると總てが餘り隔世の感——といつたやうなものが深いので皆さんの御笑ひ草として簡単に書いて見る氣になつた。

其當時田舎で伊勢参宮としての旅仕度は先づ雨具兼日覆ひとして紐の著いた着真座、之れは今の若い人には分らぬかも知れぬが、今の『44ント』乃至『オーバ』の如く雨具的のものである。衣類は無論木綿物、足には放し脚絆と云ふて股引なしに脚絆だけはいた、尙ほ甲掛けと云つて今の足袋に底のない唯だ甲だけを覆ふもの、それに草鞋を穿いて頭には『スゲ笠』それから小荷物と辨當を『サナダ紐』で肩の前後に振り分けた——之れが先づ昔の旅装束、併し斯く云ふても今の人には分らぬかも知れぬから手つ取り早く云へば例の芝居でやる膝栗毛、あの彌次郎兵衛喜多八にそっくりだと御承知を願つて置く、さて私は鳥取縣の産で私の國から伊勢参宮は往復三十

日で當時私の旅費としては米十俵——一俵が四斗入で一圓廿錢合計十二圓——の旅費であつた、伊勢参宮と云つても今日の如く汽車や自働車が都鄙の別なく無論なかつた、又参宮と云へば伊勢迄の道中にある名所舊跡は皆参詣することになつて居た、特に参宮は……三宮とも云つて伊勢の大神宮と奈良の春日神社、それに京の八幡宮には是非参ることに決めてあつた、それで田舎の若者たる私共は初めて岡山(備前)に出でそこで最初に驚いたのは一本の電柱に電線が六筋もかゝつて居る、その多いのに驚嘆した、一寸わき路にそれるやうだが、電信がどうして通信を役立てるか云ふことは私の村の村長も知らない、唯不思議として『唐人はえらいことを考へつたものだ』と呆れて居つたのです。私共子供時代には外國を指して『唐』と云ひ『天竺』と云ひ、其れ以外に國のあることは知らなかつた、尙ほ亦其の『唐』が何處にあるか、『天竺』が何處にあるかも知らず、只外國人は皆唐人と總稱して居たのです、當時は田舎で餘程の物知りの利口者といへばそんなことは一切不知、だから私共が六筋かゝつた電柱を見てあつと肝をつぶしたり、針金が物を云ふことに驚いたのも決して無理はありません。

道中の宿料は大概一泊が十二錢であり、中食が五錢と人力車が一二二錢であつた、神戸に著いて一泊が二十錢——その高いのには大に憤慨した、それから大阪まで『陸蒸汽』に乗る爲め神戸の『ステーション』に行つた、先づ『ステーション』の上へ高い橋があると、例の『陸蒸氣』が誰れも引く人なしに煙を出してトットと獨りで走る、これにはすつかり参つて了ひました、イヤ大に恐ろしくなりました而して見るもの聞くもの一として珍らしく不思議ならざるはなく、田舎者の癖として見惚れてポカンとしてあました、で、連れの友達に今發車と促されてあわて、改札口の番人に切符を渡し『陸蒸氣』の方に走つた、處が切符を持つて行けと番人に叱られて初めて切符を持つて乗るといふ智識を得た、それから陸蒸氣の中ではその走るのが早く電柱が次ぎから次へと飛んで行く面白可笑しさ、腰掛に『ヂット』して居られず、立ち上つて右往左往して又番人に叱られた、其の内に大坂に著いて下車したが、當時の所感はこの面白い陸蒸氣に一つ觸腹乗つて見たいと云ふ點にあつた、それから『ステーション』前に出で大阪市街の賑やかなことに驚いた、其日は同市に一泊したが宿料は神戸と同じで一泊二十錢、其時に大阪も神戸も電線は同じく電柱一本に六筋であつたことを能く覚えて居る。それより伊勢迄の間は物價に變りはなかつたが、伊勢に著いて参宮者として見脱してならぬと云はれたア、お杉お玉の踊、それは名物として如何にも名高いものではあるが實際親しく行つて見ると、存外平凡なのにガツカリした。

# 人身取押

京城覆審法院 伊藤憲郎

行政執行法、第一條……當該行

政官廳は泥酔者、瘋癲者、自殺を企てる者、其の他救護を要すと認むる者に對し必要なる檢束を加へ、武器、兇器其他危険の虞ある物件の假領置を爲すことを得、暴行、鬭爭其他公安を害するの虞ある者に對し之を豫防する爲必要なるとき亦同じ。

前項の檢束は翌日の日没後に至ることを得ず、又假領置は三十日以内に於て其期間を定むべし。

私は日頃から此種の規定はなるべく狭く解釋し決して之を濫用すべきものでないと思つたものである、然るに實際に於て、どうであらう、でかんしよ節を歌ふても直ぐ捕繩を出さんとする傾向は全くないか、膝頭が一寸規定より露はれ過ぎたと云ふてそら警察犯處罰令に觸れると云はれては我れ我れは安心して往來を歩けぬ。法律は世の中の悪者を征伐する正宗の名刀である、然しこれを矢鱈に振り廻すに至つたならどうであらう、正宗の名刀は無暗に抜かぬことにある、世の法律執行者が向ふ貝ず法律を濫用するに至らば法律は狂奴に等しく析角の樂しかるべき人世は暗になる、人の自由を拘束する規定は殊に適用を考慮せねばならぬであらう。

二三年前のことである、私はその頃高等學校の生徒であつた——

義弟と元山から夜汽車に乗つた、金剛山から、海水浴から京城の方へと乗込む人は可成あつた、私と義弟とは漸く三等席の隅に席を取り得た、其向ふに五十を越へた一人の男が腰掛けた、其男は非常に元氣がいゝ、汽車は出た、暫くすると何處からか時々若い男が二三人代り／＼来ては耳打ちをして又た何處かに歸つて行く、私は此の男は一體何んであらうと考へ出した、義弟は向側で本を見て居た、私は其男にとり／＼話掛けた、二言三言話してゐる中に『あつた！ 旨いことをしましてナ』其男はこゝろ語つた、何んでと思はず問ひ返すと、ようべ逃げた子供を今しがたきわどいところで捕へて来たといふのである、後で其男は新町の〇〇樓の主人君であることがわかつた、其男は尚ほニコ／＼して私に語つた、私は根掘り葉掘り聞いた、其男は尾鰭をつけて私に其の光景を語つた。

樓から連れて来た若者二三人と彼、そうして駐在所の巡査が二人元山の町端れから北へ進む出舎街道折柄の並木百葉の小枝をさへ時折、折へし折つて一行は車行した、皆な一人一人自轉車に乗つてゐた、俄かに一行は一團の塊になつて、

ビートを掛けた、道の向ふに一人の女が歩いて居た、肩優しく、艶めかしい赤い蹴出しさへ判じられた、一人の巡査は突然悲鳴にも似た奇妙な笑を飛ばした、女はようべ逃げた子供（娼妓）であつたのである。相手の男は居なかつたから墮落でなかつた、女は新米ですから未だ勤めが苦しくて逃げたのですと樓主は私に語つた。

籠鳥は籠に歸りつゝ汽車は京城に進行したのである、汽車が清涼

## ◆ゴルフ組

平田久雄

京城のゴルフ組にはいたづらっ兒が多い、▲有賀頭取などは、たび／＼下のやうな手にかゝる▲自動車で停車場などへ行くと、知つた若殿原がちよいと其處迄御便乗をといふので『あゝ善いとも／＼』と、そこは人の良い頭取、自席を譲つたりして居ると、こはソモ如何、自動車は京城に向はず一氣に龍山孝昌閣へそしてイナゴの様に飛び下りた若殿原『どうも頭取ゴ苦勞様』

里に著いた曉、一臺の自動車が驛前に停つてゐた、五六人の若い者が客車の中に現はれて列車の中道をシヤナリ／＼と歩る、當の女を前後相擁するばかりに連出して行つた、義弟は不思議そうに其場の光景を目を睜つた。

女は自動車で又元の〇〇樓に歸つて又其晩から稼業に服したのであらう——私は其法律の根柢を考へた、先輩は行政執行法第一條であると教へて呉れた——救護を要するものであると。

然し右の場合逃げた女は何んの

聞えぬ話である。

桂紅氏作、紅葉



ならぬであらう。

俄かに一行は二國の塊になつて、

するものである。

然し右の場合逃げた女は何んの  
救護を求めるか、若し救護の必要  
ありとせば寧ろ尙ほ逃げ延びるこ  
とである、取押は救護でない、こ  
の取押は法律の濫用ではあるまい  
か、借金は借金、それは訴の方法  
による外公権の發動を要せぬ、勿  
論、矢鱈に娼妓が逃げていゝなど  
と誤解しては困る——唯、萬一逃  
げた場合の話である、金と人の足  
らぬ行政整理の此頃、貴い我れ我  
れの正義の保護者である警官迄わ  
づらはして逃げた女郎を捕へさす  
ることに加勢するなんぞは全く

聞えぬ話である。

此の理屈は藝妓乃至雇人及雇人  
共通であらう、憲法第二十二條に  
『日本臣民は法律の範圍内に於て  
居住及移轉の自由を有す、同第二  
十三條に日本臣民は法律に依るに  
非ずして逮捕監禁審問處罰を受く  
る事なし』とある、行政執行法を  
法律でないとは謂はぬ、日本に居  
る者は女も男も日本臣民である、  
人身取押などと云ふことは随分狭  
い範圍に解して憲法の精神を發揮  
したい。

### 桂門南畫展を觀る

東洋畫家 加藤 松林

一月九日の午後、三越の三階に  
桂門會の南畫展を觀る。聞くところ  
によれば此處の人たちは皆一年  
足らずの稽古ださうだが、よくこ  
れ迄になつたものと思ふ。運筆も  
相當達者なり、彩色なども仲々要  
領よく、大きな圖を構へて、とも  
かく堂々描いて行つたところ立派  
なものです。

通覽するところ、極めて簡單な  
る構圖のものに無邪氣であり面白  
きもの多く、少しく道具立の多き  
ものは混亂重複に陥つて、苦心し  
たらしい割合に効果が出てゐない  
と見た。その意味において、桂陵  
氏作水壘山水、桂瑞氏作平遠山水  
桂錦氏作水壘山水などは同感出來  
るし、桂谷氏作犬と百日紅、桂林  
氏作紫陽花などは賛成出來ないも

のである。以下目錄を辿つて所感  
を述べてみたい。

擔雪氏作竹林山水  
近頃大變うまくなつた噂を聞  
いてゐたが、成程と思はれる。然  
しこの作は恐らく失敗であらう、  
ただ描寫が細かいばかりで線に勢  
なく、竹林のあたりは殊にいぢけ  
てゐる。もし勢のいゝところを  
やつついたら好からうと考へる。

南山氏作、米點山水  
米點山水は水潤の氣の紙幅に満  
ち充ちたるを喜ぶものである。一  
點一點が正しくなく乾き過ぎてゐ  
たやうに思ふ。或は紙が玉版箋ら  
しくもあつたからかも知れない。  
よき米點を成さうとすれば、紙を  
吟味して、筆の濃淡自在なるを選  
ばなければならぬ。

桂紅氏作、紅葉  
桂年氏作、木犀

この二つは花鳥を描きたるもの  
としては上乘なるものである。只  
遺憾なのは稽古によつて修得した  
以外に一歩も出てゐないことであ  
る。然し、これは注文する方が無  
理かも知れない。

惺堂氏作、柿と不老草

この人は大變達筆である。達筆  
なことにおいてはこの中でも有數  
な方であらう。然し少々達者すぎ  
て描きすぎるし、それに趣味も悪  
い。危い岐路にあると考へる。今  
暫くは自己をためて専ら師風を稽  
古されることを希望する。

桂霞氏作、櫻

大變いゝと考へます。描線も構  
圖も彩色も整つてゐる。ただ難を  
言へば、櫻よりもむしろ海棠に近  
く見ゆるのは、花をひとつ／＼線  
描きしたからであらうかと思ふ。

公天作、秋景山水

墨繪山水の密畫、なか／＼佳く  
出來てゐる。山水の中では出色の  
出來であらう。この上は今少し樂  
な氣持で製作し、自由に筆を驅使  
されるならば、更に佳き結果を得  
るであらうと考へます。

### 松林氏畫會

平田 久雄

加藤松林氏が自筆畫頒布會をやる  
毎月二圓納めてもいゝ、三圓納め  
てもいゝ、要するに滿一年目の終  
りまでに、同氏揮毫の幅——或は  
額が屆く、繪に注文あらばそれも  
申出で、いゝ。兎に角本紙の寄稿  
家や讀者は、氏と可なり深い馴染  
である、どうか御遠慮なく申込ん  
で貰ひたい。▲御申込は本社でお取  
次しても結構である。

決 戰

—僕と美少年及ライオン—

朝鮮銀行 飯 泉 幹 太

(一三三)

恰度正月十八日の日曜日に僕が三井の住井選手と一巡して午餐の卓子に就いて話をして居ると、向側の食卓に麥酒の泡を吹いて氣焔を揚げて居る紅顔の美少年が居つた

が此所に又僕の球を失敬した味を忘れないで突然仲間入を強要した恐ろしい先生があつた。渡邊ライオンと云ふ矢張銀の名課長である。容貌魁偉、力山を抜き氣は世を蓋ふと云ふ偉丈夫である。其の炯々たる眼光は儕輩を威嚇し、其の朗々たる言吐で二哩先きでキャデー(球拾ひ)を叱咤する聲は俱樂部の窓ガラスに響き渡ると云ふ豫備歩兵少尉殿である。僕を馬鹿に輕蔑する美少年が此のライオンを畏るゝ事は恰るで羊の夫れ以上であるのは奇妙の對照である。夫れも其の筈、六つのハンデーを遣つてる美少年が同點でもライオンに勝味がないからである。

美少年は殖銀の建築課長中村氏と云つて大學時代に免許皆傳を取つた大正の宮本武蔵だ。ゴルフは昨年の春から初めたが劍道とフラ／＼ダンスの奥義を應用したので割合に早く上達したの評判が高い。昨年中は毎日朝夕二回宛孝昌園に通ひ續けたと云ふ本物のゴルフ、インザ(ゴルフ狂者)だ生れつき素直な方だが、ドウ云ふものかゴルフに懸けては自分の力を馬鹿に過信する悪癖があるので會員中には仕合を申込まれまいと逃げ廻つて居る者も少くない。殊に僕が昨冬武者修業以來薩張當らないのをツケ込んで随分と麥酒と紅茶の只飲みをされた。當日も僕が當らないと話をしたのを耳にした彼は、僕の側に來て戰を挑んで止まない。若し應じなければ腕力沙汰にも及ぼうと云ふ權幕。元來僕は矮小で非力で臆病で内氣である。トテも勝味のない仕合など馬鹿らしくつて遺る氣になれないがぶん殴られるよりか負けて置く方が無難と涙を吞んで應諾した。所

第一、第二のコースでは美少年もライオンもよく當つて、肩で風切りながら第三のテー(打出す所)に立つた。彼處には彼等の頭取である濃厚なる有智選手が彼等を激勵すべく待つて居た。美少年はコゴジとばかりフラ／＼ダンス型でドライバーを振つた。球は目事に天を衝いて飛だが左曲して第八のコースに侵入した。ライオンと僕は親切に打直してはど彼に忠告を試みたが、逸りに逸つた美少年は顔面朱を腫き、自慢の腕前を頭取に見せやうと思つたのか、球の處に飛んで行つて、キャデー、チ

ヨウギー、ボー(遠くに飛ばすから遠方に行つて球を見ろの意)と怒鳴つてクラブを振つた。球は何んだか草臥れたと云ふ風で二三間先きで休息した。此んな曲藝をしたので自分のコースに出るのに七八撃を空費した。此間にライオンと僕は素直な安全球を憂飛はして二三撃で何れもグリーンに上げた第五のテーは面白い紀念の場である。此の前此の三人で競技をして僕が大敗したことがあつた。美少年が此所でドライバーを振ると同時に猛然突風を起した。球は前進の力を失ひ後ろの林間深く雲隠

◆東京から

阿部 無 佛

先日は久振りに拜肩の榮を辱ふしながら緩談の機を失し、殘情妙なからず其の節御命じ下されたる拙吟歸家早々俗務多忙、爲めに雅想枯渴、ほんの申譯まで左に、

縱横才筆夙超群、永樂町人名最聞、收拾東西南北詩、漢陽消息箇中分。

流石は少尉ライオンは此猛烈なる毒瓦斯包圍の中にあつて泰然自若『球とおならの泣き別れ』と嘯いて居たと云ふ喜劇のあつた場所である。美少年は此の思出多きテーに立ちて感慨無量の思よろしくあつて力一杯ドライバーを振つたが今度は左の林間深く球は逸走した。此の時ライオンは思はず得意の微笑をもらした、恰るで馬が笑ふ儂な表情して美少年に反對同情をした。其の後美少年はますます焦せつて左右の林に球の打ち別けを演じ君にはフエヤー、コースは要らないねと笑はれた。コ

1して競技はライオンと僕のもの美少年は隣れにも除け者となつた

も昨日の勝利は老生に取りては此の世に於ける最後の名譽、戦利品

右に對する返事、『昨日は正々堂々(？)と御勝

1して競技はライオンと僕のもの  
美少年は憐れにも除け者となつた  
僕は初めから負けるものと決めて  
たので平氣だつたが、ライオン  
は何處までも慾心を發揮して無暗  
矢鱈にキャデーを叱り飛ばして居  
た。勝負は一進一退實に見物人に  
ヒヤ／＼としたクロスゲームであ  
つた。ソウして第十六のテゐに立  
つたとき僕はライオンにハンテゐ  
を引いて一點勝つて居た。此所で  
ライオン最後の抜山の勇を盡して  
打つたが球の逆戻りの曲藝や癖中  
の妙技を演じたので十八ホールを  
終つたとき僕はライオンに六點、  
美少年に十點勝つた。美少年は切  
齒扼腕、頭取が後から續いて來た  
ので得意の離れ業も思ふ様に出来  
ないでトウ／＼負けたと罪を他に  
歸した。ライオンは怒髪冠を衝き  
クソ此次の日曜を見ろと咆哮し  
た。僕が勝つたのは敵か當らなかつ  
たのではないつて僕が身を捨て  
ゝこそと態度胸を決めたからであ  
る。が此の先きドンナ事になるか  
とビク／＼しながら慰安の麥酒を  
献上したので幸ひ事なきを得た。

翌十九日僕は氣の毒で堪らざる  
少年に慰問状を送つた。

『昨日は他力でお勝ち申し何と  
も恐縮に堪えぬ、頭取が後から御  
聲援せなかつたら得意のフラインク  
ダンスや球とおならの拙藝も勝手  
に出来、此の老生の素ッ首を奥さ  
んの御土産に出来たものと誠に  
同情の至に堪へぬ。只來る二十五  
日の日曜迄には未だ六日もあるか  
ら不眠不休で老生を打負かす戦法  
研究が重要かと存する。如何なる  
條件を持出して喜んで受諾する  
ドゥセ一度は死ぬ命、美少年の爲  
めに此の白髪交りの首を呈上する  
は老生の本懐である。夫れにして

も昨日の勝利は老生に取りては此  
の世に於ける最後の名譽、戦利品  
は勝利の記念家寶として子々孫々  
に傳へる積りであるによつて少し  
は續に障はらうがイヤでもオーで  
も今の今直ぐ渡して欲しい。偶に  
老邊に負けたとて今の若さに落膽  
愁傷は御無用、ます／＼自重自愛  
し、捲土重來の勇氣を鼓すること  
を切望して止まない。』

右に對する返事、  
『昨日は正々堂々(〇)と御勝  
になりまして、さぞ寝心地の宜し  
かつた事と御祝申上げます、敗軍  
の將け兵を談するを遠慮致します  
が只柳の下には何時も鱒が居ると  
は限らない様ですから益々御加餐  
御静養あつて來る日の御奮闘振を  
拜見さして戴きます。(一四、一  
一九日稿、美少年ライオン内認)

詩學古事抄錄

萬葉書閣主人 古城 梅溪

八 駿

周の穆王八駿に乗り西巡  
して西王母を瑤池の上に觸  
す(列仙傳に見ゆ) 穆王黃  
驄の丘に遊び草澤に獵す降  
雨あり天子乃休す、日中北  
風雪を雨らす王黃竹の詩を  
作つて以て之を哀む(穆天  
子傳に見ゆ)

風逐周王八馬啼(吳融)  
今日還陪八駿遊(之間) 未  
狂周王駕(子美) 天上嘗隨  
八駿行(景明) 如聞乘八駿  
早晚向昆丘(同) 一聽黃竹  
寫歌鐘(千鱗) 若教一牽瑤  
池御(八駿) 如雲不敢鳴(同)  
(八駿) 穆王秋色遠(夢揚)  
朝廷黃竹謠(元美) 王聲價  
春色。蕭々八駿鳴(同) 八  
駿宛迴黃竹路(胡傳) 橫戈

八駿戰功收(陳詒) 周家八  
馬如飛電(會啓)

鳳 歌

楚の狂接輿歌つて而して  
孔子を過ぎて曰く鳳兮鳳兮  
何ぞ徳の衰へたるや云云(論語に見ゆ)  
鳳哀重聽楚狂歌(宗臣)  
楚風詭高何處酒(羅隱) 夢  
醒聞遺唱。依稀楚鳳吟(明  
卿) 誰愛接輿狂(元美) 我  
自可無哀鳳嘆(同) 哀鳳那  
能終戀楚(九一) 從誰歌楚  
鳳(同) 縱成長鳳嘆。千載  
有誰聞(摩詰) 唯聞鳳兮歌  
(世懲) 今日過門客。鳳歌  
向誰長(王逖) 非有接輿在  
爭知楚鳳哀(佳胤) 楚歌憐  
鳳兮(陳詒) 千載逢哀鳳(廷亨)

ワシントンの墓に詣て

京畿道警察部長 馬野精一

華府から自動車を驅つて

南に約十六哩ばかり行くと『ポトマック』河の左岸に達する。此の河畔の小高い丘を『マウント、ヴェルノン』と呼ぶ。此處に北米合衆國の國父と呼ばれ、其の第一次の大統領として、亞米利加人が神の如く崇敬する『ジョージ、ワシントン』の邸宅と、其の墳墓とがある。我が國で謂へば、恰度桃山御陵か、畝傍御陵にも比すべき最も神聖な靈場である。

『ワシントン』は、一七五九年、夫人『マルサ』との結婚後、其の従兄弟『ローレンス』の邸宅であつた此の『マウント、ヴェルノン』を彼が永任の地として定めたのである。

此の邸内には、彼が在りし當時の佛を髣髴せしむるに足る凡ゆる材料が、ナイフやフォークの末に至る迄完全に保存せられて居るが就中『ワシントン』が最後の息を引き取つた其の病室には、彼が屍を横へたベッド、椅子、マホガニーのテーブル等が、今も尙、臨終の瞬間に在りしまゝの形で置かれてある。殊に最もアツトラクチーナものは、其の卓子の上に開かれたなりで載せられてある一冊の古本である。是れは『マルサ』夫人が『ワシントン』の死の間際まで、彼の爲めに讀み聞かせたバイブルである。

屋根裏には『マルサ』夫人の寢室がある。是れは夫君の歿後、特に夫人の爲に選ばれた部屋で、其の小窓を透して『ワシントン』の墳墓が直ぐ眼の前に眺られる。夫人『マルサ』は朝な夕な、此の窓から懐かしき夫君の墓碑を淋しく眺め暮しつゝ、終には自らも亦、此の部屋に於て亡き夫の跡を追ふたのである。

邸宅から二丁ばかり、杜の木蔭を縫ふて進むと、そこに『ワシントン』夫妻の墓標が見出される。コンモリと茂つた潤葉樹の林を背景にして、北米合衆國の偉人『ゼネラル、ジョージ、ワシントン』は、永遠の安らかな眼に就いて居るのである。

秋風蕭殺たる晩秋の夕、散り布く落ち葉を踏み分けつゝ、久しく憶がれし偉人の墳域を訪ねて、しばし其の墓前に佇み、乾坤一擲の壯舉を回想しつゝ靜かに英雄の佛を偲へば、故人の風半髮髯として眼前に迫るの概がある。



迷信を排したい

久原鑛業會社  
京城事務所長

小 瀧 元 司

迷信程社會を毒し人生の發展を妨げるものはないにかゝはらず何處の國にもない處はないのは誠になさけないと思ひますが、中には朝野の御懸々にも中々多い一例を申せば彼の透視です。透視に依つて土中幾尺の下に金が埋藏されてるとし數十萬の大金を投して之れが堀取を試みる向きもある之を單に透視だから投資してるとし、やれる譯にはゆくまい。

夫れから神佛の供膳です之れも又老人の後世願として看過する譯に行かぬのは醫家の能く叫ぶ處の病毒の傳播媒介者たる蠅が喜んで供膳に群がり夫れから夫れと細菌を運搬しつゝある事です、若し夫れ虎列羅、ベスト杯の流行時に當つては實に恐るべき傳染力を促し

滑稽な御話があります、鎮南浦で虎列羅がはやつた時でした、尾籠な御話ですが私の工場の廁が掃除が行届かず如何にも不快に思ひまされたが、單に小言許りでは面白くないと考へ、例の駄じやれ根性を發揮しまして便所の壁に左の狂句を貼り付け知らぬふりの半兵衛をきめ込んで居ました。

汚臭紛々突鼻來。  
着蠅滿廁似浮埃。  
長霖不歇墻生菌。

痢疾流行是好娼。  
ソしたら翌日は奇麗さつぱりとなつて壁の樂書もとれて居ました、茲で考へたのは駄じやれも時には役に立つと思ひ獨り喜んだことがありますが、之からソロソロ蠅の期節になりますし最初の蠅程恐しいものはないとのことですから雨漏りにバケツや洗面器を並べるよりは屋根の葺替をすると同く各地で蠅の買上げをするよりは其御かねで蠅撲滅の藥を各戸に配り同時に例の塵溜を改良してはどうでせうか。



溫 突

京城師範主事

白 神 壽 吉

【一六】

大正八年渡鮮、すでに六年の月日を過した。その間、緬南浦に二冬、平壤に三冬、京城に一冬を送つたが、無論スチーム、ペーチカの備付けの高樓に寒を防ぐ仕合せはなかつた。

路上の撒水が直ちに凍り、屋外物言へば聲さへも凍る程の寒にも度々出遭つた。

乍然、一度緩を温突に取れば、寒月霜に冴えてゐるのがあまりに殊更らう、寒陰計の指度が精確なるやと疑はせる、スチームもペーチカも思ひつかぬ。

六冬の嚴寒を苦もなく過し得た思へば温突なるかなだ。温突禮讚、温突禮讚。恐らく、誰もが、これを味へば温突禮讚の人にならないものはあるまい。

スチーム、ペーチカは、燐寸箱を積んだ様な、機械文明の國に相應しい建物の間にのみ意味がある朝鮮の風土に即しての、冬の生活は、温突なる哉。

處が、此の禮讚者が新年早々足先からの風邪をひいた。今年の風は可成に性質が悪るい。押し強う押した揚句、とうとう引籠、所謂温突に病を養ふことになつた。

眞に、ばかり、ばかり床の下から温まる邊、風邪に取込まれた脊骨がぼつぼつ延び始める。又更にこれこれ、温突なる哉。

風邪の手が緩めば、緩む程病後の快哉は温突の下温みから、愈高められて来る。

又更にこれこれ、温突なる哉。温突禮讚は、益々昂して、温突感謝に勢進む。

一體、これ程のものが何時生れたか、戸籍調べが、したくなつて来た。又風邪との争ひを、こんなに苦もなく仲裁してくれた、温突に對しては、義理合としても、身元調べはしなければならぬ責がある。全く温突禮讚の時が来た。

争の名残を一日温突に養ひながら、のそり、のめり出て、書架を探ると、原始時代の研究と云ふ册子が、芥にまみれながら目につく。もしやと歸くと、あるある。關野博士の古代の建築と云ふ小文獻の中に、そして、力強く戸籍しらすべすることの出来たことが、此上もなく嬉しい、温突は何とも思つてないかも知れぬ。さり乍ら、自分が知つたことから、限らない懐しみを覚える共に、温突に對する責がつくされて、温突禮讚の眞意を徹することが出来た。

左に掲げて、温突禮讚の辭に代へる。

朝鮮は雨量之く、且つ乾燥するから、森林の發育がよくない昔は今より無論木材に豊富であつたであらうが、到底内地と比較する事が出来ぬ、檜や杉や梅

樅などは無かつたのである、其の出材は僅かに樅や落葉松や松の類に過ぎぬから、建築の上にも彼此相當の相違があつたに相違ない。その上冬は非常に寒いから壁も厚く土を塗り、早くから床下に温突を設けてゐたのである。既に新唐書に高句麗の風俗を記して『多月皆作長坑、坑下燃火以取暖』とあるは、即ち今の温突の事である。

新羅任那百濟は果して當時温突があつたか、無かつたか明かでない。或は高句麗の温突が、半島に擴がつたのであるかもしれぬ、しかし冬の寒さは内地とは比較にならぬ程であるから、内地の様に床を高く、板張にした様なことはあるまい。云云はて、さて、世間は、やれ文化生活、やれ文化住宅、やれ文化村と、文化文化と八釜しいが、文化は、機械ではこね上げられぬ、人間味が自然を耕すところに生れるものではあるまいか。

關兼定の記

吉田 莊 一

三矢警務局長は、この間北鮮地方を視察した、酒こそ飲まないが、『オイ君鳥渡……』といふので、誰れの佩刀でもイキナリ鑑定するので、存外のびくした旅であつたらしい。▲會寧では守備隊の魚住少佐の刀を見たが、それは無銘乍ら兼定の作、而かも兼定と來て居るので、局長イヤこれは大邊……と案を拍ち『兼定は素劍斃字に片切双挺の焼双水ぞしたたる』といふ古歌を題した上に、末句は『よだれたしたたる』とした方が實感的だといふ一晩ぢうためつすかめつ。

含み、時に動植物の兩者を包有す

化石の獨言

總督府技師 市村毅

◎吾輩は化石である、即ち古生學者の高遠なる御説の通り前世界の生物遺跡である、吾輩は是迄随分長い間或る深山の岩の中に埋もれて居つた、それを某地質學者の手によつて掘り出され、只今では某地質學研究室の標本箱の中に備へ付けられる様になつた、研究室に居るゝ吾輩の發見者はまだ御年こそ餘り召して居られぬ様に拜察するが、兎に角此方面の特別なる熱心家と見えて研究室内に山の様に重ねられた標本箱の中には、ありとあらゆる化石がそちこちから集められ、それには一々何が何やら分らぬ歐文の學名さへ付けられて居る。

◎此程吾輩も漸く箱の中から引張り出され、先生の御鑑定を受けることになつた、その時先生は暫くの間テツと吾輩のことを見詰めて居られたが、ふと思ひ出した様に小さな鑿を鐵槌とを取出して、コツ／＼二三箇所不明な部分を剥がした後、側の大型な洋書の畫と吾輩の姿とを引比べてニツコリされた、多分吾輩が或地質時代を定めるに特に重要な化石であることを御分りになつたのだらう。

◎實際吾々化石は植物たる動物たるを問はず、層位學を研究する地質學者には何よりも大切である何となれば彼等は大方吾々によつて地層の新舊を定め、吾々によつて遠く離れた地層の群を比較對

照せねばならぬからである。

◎吾輩達は此世界の始めから今日に至る迄生物の進化消長を語る唯一の手懸りである、即ち吾々によつて或る時代には無脊椎動物が多く、或る時代には魚類、或る時代には鳥類、爬蟲類さては羊齒類などゝあらゆる過去の動植物系統の變化をそれからそれへと辿ることが出来るのだ、現に吾々を取扱つて居る人間そのものゝ出現が地質時代中極最近に屬することが明らかになつたのも、實は吾々の御陰であると考へて貰ひたい。

◎吾輩は過去に於ける生命の一表現である、即ち吾輩共の存在によつて、生物の一部分が世の移り變り年月の經過と共に、早晚吾輩同様の姿になることを逆に想像出来るであらう、吾々従来の經驗に従へば生物界に當然起り得る著しい現象は其發達のクライマックスに伴ふ退歩と衰滅とであるが、吾々を化石化石と云ふて居る人間そのものさへも、今後何十年か、何百萬年の後か分らぬけれども必ずや人ことならぬ化石となる連中が澤山出来るに違ひない。

◎吾輩共を含むものは殆んど皆水成岩である、それも石灰岩や頁岩板岩等の緻密岩に多く、砂岩から礫岩へと少くなつて行く、それは恐らく保存難易の結果であらう、此場合或るものは植物化石のみを含み、あるものは動物化石のみを

含み、時に動植物の兩者を包有する例も少くない、そしてそれ等の種類如何によつて、その岩石が海岸近くで出来たか、遠い海の底で堆積したか、或は湖水の産物であるかと判断出来る様になる。

◎是を經濟的方面から云ふと、早い話が炭層と吾々との關係であるつまり植物が石炭の原料である以上、それに伴ふ植物化石の研究は他の場所に於ける炭層發見、探鑛の指針となる點で大切だ、又それと共に其石炭が如何なる植物から出来たかも併せて了解し得るに至るのだらう。

◎だが世の中は未だ幼稚である、科學に對する一般的智識の缺乏のために稍々もすると、吾々化石などは骨董品扱ひにされる、それにつれて吾が高遠博學にして敬愛す可き古生物研究者なども、世の中から没交渉であるとの理由のもとに、葬り去られ勝なのは全く同情に堪えない。

朝鮮一の話

平田久雄

中央婦人病院長の衣笠さん、餘技にかけては何んでもウマイ▲乗馬繪、盆裁、刀劍、いづれも堂に入つて居る▲就中、刀劍は本阿彌光遜から『朝鮮一』と折紙をつつけられ、鼻息却々荒い▲この衣笠さん先日鏝身の一刀を『これは見込がある』と買ひ取り、東京へ鑑定に遣ると、果して備前基光……それも異常の傑作▲おまけに○百圓で賣つてくれと切りに懇望する人がある▲で、遂々賣渡したが、朝鮮一となると、色々な餘徳がある、半分位奢つてはどうか……と同業仲間て評判。

朝鮮の温泉

總督府地質調査所 駒田亥久雄

次は大正十二年春、私が恰度調  
査の爲めに東萊に滞在して居た時  
に面營浴場の改築の爲め舊浴舎が  
取毀られた事がある。其の時棟木  
に固く縛り付けられて「謹封」と  
書かれてあつた「上標文」を見た  
から最近百數十年の變遷を知る好  
材料として左に全文を記して見る

乾隆三十一年丙戌九月初七日  
温井改建上標文

(同年七月初八日卯時開基、八  
月二十四日卯時立柱、九月初七  
日巳時上標)

源潔洗清病欲蘇於臨沐、孔嘉惟  
新、竊惟東萊之温井、上棟下宇  
憂不萃於震驚、何必仍舊、實源  
長桑之上苑、功無讓於華清龍其  
暖水、作舍作湯奄經七十六歲、  
劑不借於本草鵝何施方、或洗或  
飲即瘳百千萬病、人從遐邇而來  
不幸年深而歲久、水道壅澗慨汚  
濁之難流、處有女男之別、致有  
井堙而家傷、老屋北傾嗟併轅之  
無所、幾多行路之見惜、乃丙戌  
之新秋、梁棟店樑賢侯許以影島  
井城、坐看邑人之懷慚、移王坐  
以舊址、工匠役丁善勇資於南村  
北里、微二天獨有豈經始而營之  
咸頌萬家之活佛、由百隣俱興亦  
突兀而成也、大庇千厦而歡人、  
爽增奏輪非舊貫而改作、少輟鄣  
斥、窈窕湯潔返初墟而得宜、試  
聽巴唱、拋梁東、靈藥千年藏不  
盡、拋梁南、山外三山梁背崇、

採之何必送秦童、長郊漢々見田

驪、入湯洗沐出、拋梁西、  
分明淑氣添靈液、喜與農人坐夕  
談、崢嶸金井好山谿、濟活吟呻  
幾響倪、拋梁北、藥師菩薩命醫  
民、拋梁上、西來輪齒從天竺、  
見生靈蒙佛力、皇々玉帝下民相  
遂令昔疾愈于今、拋梁下、使星  
來往亦欣然、後笑先咷浩々唱

如繩垣路通車馬、浴也稱湯坐也  
舍、伏願上梁之後、望宇長新、  
同志者嗣繼赤犬而又修、泉水恒  
潔、太守之名與朱鳥而並際

製 述 金 應 虎  
獨鎮兼守城將都護府使姜公必履  
(內監)洪致祥(都監)郭昌基  
(座首)辛兌奎(監官)文聖教  
金貴榮(色吏)崔應斗、金振鐸  
(使令)車命三(都木手)僧圓  
一(都石手)僧存元(木手)金  
命興、僧英輔、僧雪悟、僧廣順  
僧昌進、李必才、盧漢秀、朴貴  
孫、僧振明、僧元敏、僧彩元、  
僧侃聰、僧豐悟、僧聖礼、僧長  
軾、僧志煩(治匠)張設貴、(

化主)尹喜大、白光震、金泰成  
姜翹周、鄭世康、千再德、金有  
珠、徐尚迪、金尙成、金致三、  
洪啓河、金秀長、金貞和、梁義  
厦、文道恒、朴秀彩、趙孟三、  
金兌傑、金重貞、田茂化、朴東  
培、金熙鳳、朴致相、黃振億、  
李運泰、朴根行、朴貴貞、僧成  
伯、僧豐海、僧知賢、金禮禧、

金漢迪、咸有德、李寬先、火丁  
僧四名式五日輪回  
右の上標文と同じく謹封せられて  
更に左の一通の上標文を見た。

嘉慶元年丙辰五月三十日重建  
上標文

水生金水生疏樂不啻於野鶴、不  
日乃成、蓋效泉始自羅代、丙而  
建内而修時有待於年紀、是誰之  
力、著靈異今至幾齡、易王坐而  
重新乃三十年前姜侯之譯、事有  
其時、茲隨贊語、祛甲履而改章  
即五六月内尹公之恩、屢豈水屢  
幫助拋梁、拋梁東、靈藥千年藏  
不盡、拋梁南、山外三山梁背崇

◆山陽線より

權藤 九州

二三週間の豫定で、京城を發し  
今東京行の車中に身を横へて居  
ます、議會も一見せねばならず  
舊知も訪ねればならず、前途可  
なり多忙、いづれ歸來萬々。

朝鮮鐘城夕山陽、兩地風光收  
一望、客路何論千里遠、山河  
相送入家鄉。

採之何必送秦童、長郊漢々見田  
驪、入湯洗沐出、拋梁西、  
分明淑氣添靈液、喜與農人坐夕  
談、崢嶸金井好山谿、濟活吟呻  
幾響倪、拋梁北、藥師菩薩命醫  
民、拋梁上、西來輪齒從天竺、  
見生靈蒙佛力、皇々玉帝下民  
相、遂令昔疾愈于今、拋梁下、  
使星來往亦欣然、後笑先咷浩々  
唱、如繩垣路通車馬、浴也稱湯  
坐也舍、望宇長新、同志者嗣繼  
赤犬而又修、伏願上梁之後、泉  
水恒潔、太守之名與朱鳥而並際  
製 述 郭 舜 衡  
府使 尹公長烈(座首)朴乃龍  
(成造監官)魚瑱(色吏)許仁

大(實德監官)朴宗謙(色吏)

金應瀾(使令)秋龍(都木手)

淨、李次突。

乾隆三十一年は我が後櫻町天皇

つて殊に最近數年此の方に浴舎其  
他の設備の整つた事は云ふも更な

聽巴唱、拋鰲東、靈藥千年藏不盡、拋梁南、山外三山梁背梁、

李運泰、朴根行、朴貴貞、僧成伯、僧豐海、僧知賢、金龜禱、

府使 尹公長烈(座首) 朴乃龍(成造監官) 魚瑣(色吏) 許仁

大(責應監官) 朴宗謙(色吏) 金應潤(使令) 秋龍(都木手) 金成大(木手) 僧觀漢、僧萬岑 僧大淳、僧心窓、李東武、金龍瑞、僧道眼、僧采淨、金光澤、朴萬先、金得才、姜興世、僧太演(治匠) 金得旨(引鉦) 朴文淑、朴萬福、李福伊(化主) 朴宗謙、魚大麟、鄭邦都、金秀兌 僧就浴、僧就周、僧起仁、僧妙

淨、李次突。 乾隆三十一年は我が後櫻町天皇の明和三年であつて今より百五十九年前である。然して其の當時既に『大庇千厦』の湯町を形成し浴客歡樂の巷たりし様に思はれる。是れで見れば東萊溫泉の俗化せられたのも割合古い様である。 現在の温泉場の基礎は明治四十三年日韓併合前後に成つたのであ

つて殊に最近數年此の方に浴舎其他の設備の整つた事は云ふも更なり一夜漬の細君も選擇御自由であつて歡樂境としては何一つ缺く所もない様になつて居る。今内地人約四百、鮮人約四百五十名を包擁し宏大なる旅館、料理屋、浴場等揃比し眞に東亞の玄關たる釜山府の一部を形成して居るが如く電車自動車の便がある。

## 歸郷雜記

鑿發新聞社 田村直一

十年振りに止むを得な 歸つた私の目から見る 用事で歸郷して見る と内地に居る同年輩の と、未だおきげに髪を 友人共は嫌に理屈ッぽ 結つて小學校に通ふて くて、無暗に年を取り 居た等の娘が子供の二 込んで居るやうに見へ 人も連れて挨拶に來ら る、それでも會つてし れたのに喫驚したり未 んみり話して見ると昔 だ眞ッ黒い髪で圓々と の餓鬼大將には矢張り 肥つて居た等の叔母が 今でも、あり〜と其 胡麻鹽頭になつて老眼 の氣分が窺はれるし、 鏡の上ッ縁から所謂額 泣きべそであつものは 越しに、私の顔を覗き 矢張そんな感じがする 込んで、ありし昔の兄 一夕、同氣相求むる友 じゃ(私の父)に、そ 人達七八人から歡迎の つくりだなどと意外な 寛味で招待された席上 ことを云ふ。 偶々腕白時々の追想談 何しろ十年目と云へば に時刻の經るのも覺へ 一と昔の事惡戯仲間も す、各々自慢話や失敗 それ〜お爺になり濟 談をして居る中に、私 まして居るが朝鮮から 達の郷里に居る頃組織 諸君も遣つて見給へ、 た。

して居た、贈鍊會と云 如何なる場合にも泰然 頗る禮貌な催しをして 自若として動ぜざる事 居た事に論及した、此 山の如くでなどと、頻 會では大雨或は雪の降 に自慢の鼻を撫でる。 る深夜に會合して、抽 斯うした話の眞つ最中 籖に依つて一人宛、額 に先きから呼んで置い 守の森の奥にある昔か た寫眞屋さんの準備出 ら大蛇の棲んで居ると 來上つてマクネシウム 云はれた古い沼の邊り を、バアツと焚いたの に行つて石を並べると であつた、と同時に件 か枕を打つて置いて自 の講義をして居つた金 分は斯ふ云ふ事をした 森君はアット云つて飛 と高慢の鼻較べをした び上つた、私はたつた ものであつたが。 一人お客であるの故を 其當時私と常に競争を 以て可なり我慢をして して居た、一方の隊長 遠慮してゐたのであつ 金森君も談偶々此の一 たが、元來が惡太郎仲 件に及ぶや、相變らず 間の事だ、オイ金森君 の負けず嫌いで、曰く 止せッ今のザマは何ん だ、と一人が云ふと、 皆が雷同して、それで も禪かとやり出す者も 居る、これで金森君す っかり男振を露なしに したが、こんなのも時 にとつての好座與だつ た。



# 帽子の客

蝶 炎 今 村 軒

〔110〕

◆最新流行の研を競はせ、各國の粹を蒐めて陳列し、顧客をよべる

或る目貫の塙所に在る帽子店へ、ツト這入つて来た一個青年の客、其風貌はと見れば、陰鬱無表情にして、何處かに永く虐げられたる忍苦の跡を刻み、少しも快活の氣なく、一體に人間味が枯らびて居る、其著装はと見れば、古くより傳來せし様式の木綿の素服、而も垢つき汚れたる其胸間に、金時計をブラ下げて居る……と云ふ如く持物著装の一個々々に、甚しく不調和と不統一を表はし、片手に舊式の冠の半ば破れたるを携へ、之れを捨て兼ね乍ら、新しき帽子を買はんと陳列棚を覗き込んで居る。○臆て目に著いたのは、黒色山高リボンに金筋の入りたる、帝國主義型と稱す帽子である、此れが一番氣に入りたる如く、何回も頭に載せ、姿見に寫して見て、

『ドーデス、私によく似合ひませふや』

と店員に相談して其意見をきく、『其型は少し舊式です、特に貴方のオツムには適しません、よく考へて御覽なさい、國家と云ふものは、領土、主權、民衆の三要素から成立することは、政治學の教ゆる版であります、それも形式よりも實質が要ります、貴方の國土には、國家を存立せしむるに足る丈の、經濟力即ち

生産力が天から恵まれてありません、又主權、而も完全なる實力と民衆が確認信頼して守り立てたものが、古から有りましたか、猶又、國家的自覺と團結力を持ち奉仕と犠牲を拂つた民衆がありましたか？は、皆疑問です、貴方の頭の中では、國家主義と云ふ様なものは溶解しないと思ひます、此型は止めて外のにしなさい』

ト云はれて見れば成程と感じて、他の型を探す。

◆今度は種々緋の色を爲したる鳥打帽に著眼し、頭にはめて見て又店員に相談する、

『ソレも貴方に似合いません、其れは共産主義型と稱する、ルシア式のもので、元祖はクロポトキンと云ふ人です、一時各國の下層社會に流行しましたが、今日では被る人が既に減つて行きます、矢張時代遅れです、此帽子の發明者は、人間味とか人間性とかと云ふデリケートな所へ考へ及ばなかつたのです、貴方の國の現状は、各文明國が遠き昔に經て通り去つた、氏族制の時代を未だに多分に持つて居ります、偶まにロシア被れをした青年等が、之れを用ゐて居るのを見受ますが、其恰好たら狂犬に袋を被せた様で、二目と見られません、一體赤き色は野卑

な色です、鈍感なる眼の網膜をよく刺戟します、是れが野蠻人が赤色を好む所以です、臺灣の生蠻人とか、南洋の或土人とか飛彈山奥には、共産主義がよく行はれて居りますのは、偶然では無いのです、およしなさい、外にも色々新型があります』

此の意見には、餘り感心せぬらしきも、定見が無いから又外を見立てる。

◆次に、赤色の社會主義型と稱する勞働帽子を取出して、

◆住井さん

平田久雄

ゴルフ姿で堂々と内地に押出して見事失敗した人に飯泉さんがある、委細はその『恥晒しの記』の本文でつくされて居る、然るに茲に亦た三井の住井さん、同じくゴルフ姿で先月東京へ御出張……これが亦失敗に終らなければ宜いがと、胸をドギク／＼させて居る人に、天野さんがある、兎に角住井さんはその成敗奈何に拘らず一件報告書だけはわが雜筆に發表されるさうです、どうか四月號をお待ちを乞ふ。

『此れが氣に入りました、一番よく似合ふと思ひます、スタイルをよく見て下さい』と得意満面である、店員は心の中で、此客は自分の頭の恰好を知らぬ愚人だと、考へたが、ソコが商賈柄、よく見る飛をして後、

『御氣の毒ですが、夫れも似合いません、貴方の國には兩班の一族がある許りで、嚴格なる意味の社會と云ふものが存在しないから、人と人との交渉が、極狭

い範圍に限局せられて居る、社

客は棚の上段にある、暗黒な色

ら認めて、掴み得たのです、併し乍らあの劇作は甚だまつかつ



しむるに足る丈の、經濟力即ち

られませんが、一體赤き色は野卑

から、人と人との交渉が、極限

い範圍に限局せられて居る、社會性を持つた、社會人が、社會的意識に依り、社會的活動を試みて居る事實は、何處にも見出し得ないので、鳴物を入れて宣傳しても、其思想が發達すべき、素地も要素も皆無です、猶此帽子を被るには、貴方の様に生白い手ではダメです、ハンマ

一つ買つて懐中へ仕舞ひ込む、移り氣の多い浮氣性の此客は、猶右左陳列棚を見廻し、俺が被つて男振を引つ立てる品は有るまいかと、探し廻る其中、

『無抵抗主義』と云ふ、女の被る様な物を、隅の方より引張り出して説明を求め、

『コレは何と云ふ帽子ですか？』  
『其れは印度の帽子で、元祖はガンヂーと云ふ老人ですが、夫れをかぶるには、宗教的バックがなければダメです、無宗教國人には似合ません』  
『先刻買求めた、社會型を下にかぶり、此れを上を巻付けたらドーでしょふ』  
と一風變つた奇抜な質問を出す、店員はあきれたが、ソコは商買柄『何所の國にも、二枚舌は使ふ人はあつても、二枚帽子をかぶる人は無い様です』  
と巧みに諷刺する。

客は棚の上段にある、暗黒な色の、トゲトゲのある、奇妙なる型の帽子に目を寄せ、

『あれは珍しい帽子です、何と云ふのですか？』  
『アナキズムと云ふ型です、迪も危険でかぶれません、あれは賣物では有りません、參考品の標本です』

と店員が答へる、其中客は華美にして濃艶なる、ケバ／＼しき、色彩に富める物のみ、陳列しある部分に著目する、ハートの形なる、戀愛至上型、星や莖の模様ある享樂型、最卑劣なる形状のアニマルズムなど、男女共通の帽子にジロ／＼と目を落して恍惚とする、併し流石に此等には手も觸れず又説

偶 感

平野 迂 禪

人のあや見る目はあれど中々に千里の外をみるはすくなき

明をも求めず、根氣よく他を探す  
暫くして、民族型と云ふ中折帽を持出した時、店員は、

『夫れが第一等よく、貴方のオツムに適合します、貴方の國は古來他民族に、屢侵入せられた苦き歴史を繰返して居るから、傳統的に民族と云ふ觀念は有ります——團結力は薄弱なりとするも——先年絹の手袋をはめて假面をかぶり『獨立歌劇』と云ふ、芝居を打つた事がありました、あれは無論國家的の現はれではないのです、皆の人々が、何か目標を欲しがつて、暗中窺察の際、偶ま現れたる、萬歳と云ふ電氣文字により、民族意識ハハふものを、ハツキリと自か

ら認めて、纏み得たのです、併し乍らあの劇作は甚だまづかつたのです、茲に民族型に、白と黄との二種あります、此黄色の方を、東亞共存型とも云ひます之れを被りなさい、此次ぎ芝居を、やる時は、舞臺監督とよく相談して、相當の修養と訓練を得た上で、合理的に世界の檯舞臺で他と連合でやりなさい』  
と親切に教へられ、成程之れが一番無難だと考へ、代金を拂ひ買取つて、早速かぶる、店員は其スタイルを眺め、

『全くよく似合ひました、結構です』  
と褒める、客は喜んで威勢よく、『左様なら』  
と出て行く、店員は、  
『毎度有難う』

女中の苦諫

吉田 莊 一

たび／＼斯ういふ欄内に引出すので、相濟まぬ氣がする▲どうか殖銀の森さん、あつちを向いて耳に蓋をしてゐて貰ひたい▲森さん女道樂は遣らぬが、酒道樂は一人前遣つたもの▲殊に鎮南浦在住時代は徹宵杯を手にして腰のぬける迄ガブリ／＼、勿論獨身時代だつたが、或る日氏の老婢が、開き直つて主人へ一場の忠諫、それに驚く主人でないが、のツ引きならぬのはその女中日記、正月以來の主人の醉態振が事もこまかに、寫實的表現、それに依ると、一日だつて裏面で、歸家に及んだことはない、この日記には追の醉李白もフームと唯一言、爾來一切ふか酒禁止……因にこの老婢は自修獨學今では某病院の看護婦長。

# 司 法 偶 感

總督府法務局 松 寺 竹 雄

最近あらゆる科學が異常の發達を遂げ、國民の思想が著しく變遷して來た結果、社會問題や思想問題に就て世の先覺者を以て自任する識者の間に、社會生活に必要な諸般の法則に關し可なり侃諤なる論議を惹起してゐるやうである。司法關係に屬するものとしては、曰く労働問題、小作爭議問題、經濟的生活の安定、失業保護問題、治安警察法の廢止、刑事被告人國家賠償問題、陪審法（大正十七年より施行の豫定）或は家事審判法の制定等數へ來れば枚擧に遑なしと云ふ状態である。かやうに百事更新を要する秋に當りて我が司法官の職に在る者は常に時勢の推移と社會の實相とを考察して文化施設に於ける社會共同生活の規範なる法律を運用して行かねばならぬのである。

古の專制時代には『惡法も亦法なり』と云ふ見解の下に民衆に臨んだものである、又徳川時代には法令は民をして遵らしむべく知らしむべからずと云ふて蒼生を壓制したものである。元來法律は正義、人道乃至信義等を基礎として出來上がつた民衆生活の規範たるものである以上簡くまで之を民衆に理解せしめ其の各般の行爲に付指導者の地位にあらねばならぬものである、民衆も亦社會共同生存を爲す上に於て瞬時も法律によらねば生活し得ないものと自覺せねばならぬのである、所が是迄の經驗から觀ると一般民衆は未だ法治國の民としての訓練が足りない爲め法律的觀念が薄く大部分が其の常識に取り入れられてゐない傾向があつて裁判所に現はるる事案が多く懈怠や不注意の結果から來てゐるやうに見受けらるる。

生活様式が複雑多岐に亘ると共に種々雑多の紛争を醸すのは止むを得ないとして一般民衆の共同生存が法的生活なることを自覺し、之に目醒めて銳意各自の行動を改め、正義や人道、信義又は誠實の心を以て生活を改善して行けば必ず是迄の弊風は匡正せらるると思ふのである。前にも述べた通り法律は國民生活の法則であるが主觀的に之を觀察すると法律其のものは活物であるけれども其の條章たるや素死灰である。只其の眞の精神と云ふものは之を運用活動せしむる裁判官の公正にして且つ自由なる意思の判斷力の如何に依つて現はれて來るのである。故に法律が正義人道の規範とすれば裁判官は正義人道の擁護者である、であるから裁判官たるものは恒に時世の進運、國民思想の變遷、經濟の状態等あらゆる方面の事情を觀察研討して時勢の進化を對象として之に遅れず否寧ろ其の推移を洞察して一日の長たるの努力を以て事案に接し民衆を指導しなければならぬのである。

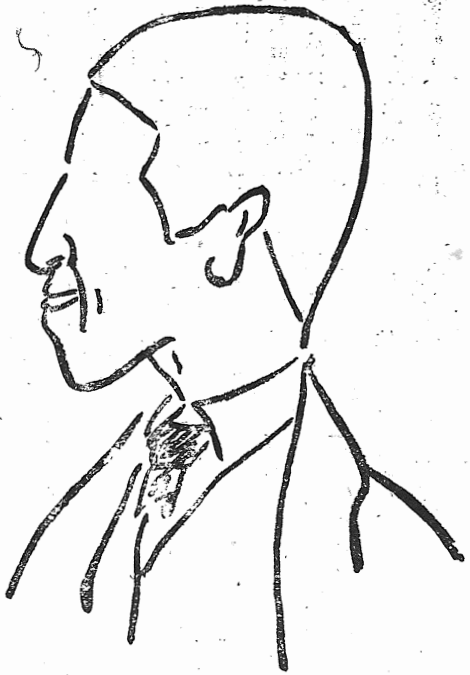
裁判官が事案を取扱ふに當り民事と云はず刑事と云はず裁判の骨子とする所は事實の認定である事實の認定が正鵠を得てゐるか否かと云ふことに就ては豫め標準と云ふものはない、證據の取捨に關する裁判官の獨創的判斷に俟たねばならぬ、其の認定に基いて法を運用し合理的判斷を下すのである、即ち裁判の繩束力と云ふのは人に對して或る行爲又は不行爲を命ずる法律の精神を公明正大に當事者に強要するのである、其の結果として國民をして國家統治權の下に服従せしめ、公の治安を維持し社會の安寧秩序が保たれて行くのである、然しながら裁判官の裁判は人間の行爲を齎しく人間が裁くのであるから神様でない限り有智有能の人士と云へども無缺完全とは云へない、が一面

から云ふと如何に科學が進歩し如何に人事が複雑錯綜し紛糾しても畢竟するに人間の智識から流露し人間の力に依つて發現するものである以上人間の價値を以て批判し得ざる理由はないのである。(神秘的事實あれば矢張り神秘的の判断を俟つの外はない)唯遺憾に思ふのは從來裁判官が往々にして單に六法全書に膠着没頭して徒に形式論理を偏重し成文の辭句に拘泥し國民の法律感情を輕視して曠々乎として瞬時も停止するところなき時世の進運を等閑に付して法の適應性を發揮し得なかつた嫌がなかつたらうか、是れは取りも直さず社會の進運に順應せず國民思想の變遷や經濟狀態の推移を研究せざる結果であつて時に或は所謂『化石』の批難を招いた所以である。

從來裁判に對する批難は色々に論評せられてゐる、つまり裁判は餘り嚴格すぎる、或は固定的である、融通がきかない、甚しきは人の内心に存する良心の聲を無視するなど云はれてゐる、是等の批難は抽象的のものであつて、單に一部に對する批難に過ぎない、裁判官全體に對する批難では素よりない、が要するに一部でもさう云ふ批難攻撃を受くると云ふことは洵に慄慄すべきことである、これ一方に民衆の適正なる輿論を無視し民衆の心裡を理解せざる結果ではあるまいか、斯る事が度重なつたならば遂には司法に對する國民の尊敬は地を拂ふに至るであらう。

序ながら一言して置くが時世が瞬時も停止せず進化するに拘らず、法律は依然として舊態の儘である、人間に譬へると祖父と孫位の年月を隔て、法律と人文とは遠ざかつてゐる、早い話が現行の民法、刑法、商法の如き實體法は二、三十年前に立法制定せられたものである、飛行機などは夢にも想像の付かない時代に出來たものである、其間に科學は遠慮なく發達して無線電話から無電放送等の發明があり一時世界を騒がした殺人光線などの驚異すべき化學上の發明が試みられて來た、又近頃權利の方面では所有權に付ても從來よりも異なつた解釋になつて來てゐる、所有權は憲法の保障あるにも拘らず一私人の權利を制限し公益上の一制度となるの傾きがある、(現在にても土地收容法等はあるが其れ以外の見解に依るもの)亦契約自由の原則も時世と共に推移する公序良俗の觀念に左右されて従前は有効に看做されてゐた契約も根底より覆されぬとも限らない、其地財産處分に關する制限とか又は價權の行使に對しての制限とか種々の方面に影響を及ぼさんとしてゐる。次に法律を適用する裁判官が日進歩の今日に於て法律の成文は素より未だ學說、判例にもない新しい事案に接したときの覺悟である、言ひ換へれば立法の缺陷に對する場合の事件の處置である、裁判所は解釋の餘地あるに拘らず法文の不備不完全の故を以て裁判を拒否する能はざるは無論であるが此の際裁判官は自己の創造力に訴へて自ら所謂解釋立法の自由探求發見をするのである、裁判官が自ら立法すると云ふ説は三權分立の立憲の本義に戻るやうであるが、それは形式上の立法ではない事實の價値判断をするのである、其の觀念は何に基くかと云へば即ち正義、人道、自由、平等、信義、誠實等の論理、道德及經濟的の原則に據り、時代精神や、社會意識を斟酌し時世の眞相を覓めなければならぬのである。

近來法の社會化、道德化等盛に唱導せらるるのを聞くが凡ての方面に於て民衆を基本として漸次改造の機運に向つてゐる、裁判も近來著しく社會化し、民衆化して舊來慣習的に行はれた市井の商取引なども社會の通念や進展に伴ひて弊害あるものはどしどし摘發矯正せられ醇良の氣風を誘致するやうになつて來たのも慥に裁判の民衆化を證するものであらう。さりながら裁判官は時流に媚びるやうな態度を執つてはならぬ、亦輿論が如何に盛んでも之に迎合して自己の天職を冒瀆するが如きは最も慎むべきことである。裁判官の天職は理論を考へ法律を守り、世間の實相に著眼して民衆思想の趨嚮を察し、道義の眞髓を甄別して公正持平其の任を盡さねばならないのである。



素 人 漫 畫

殖産銀行 中 島 司

京城は大和町に廣江澤次郎いふ人が鋪座まします知る人ぞ知る。拙者の舊友だ。御本尊は近年頓と京城を留守勝ちにして滿洲は奉天を本據とし、時たま御來城あつても、御滞在はほんの數日にしてブイと北へ飛ばせ給ふ。此の豪傑の存在を初めて拙者が知つたのは過ぐる大正三年の春であつた。その頃拙者は京城日報に記者として朝鮮の工業調査なるものをやつて居た。或る日の午後、當時長谷川

町にあつた廣江商會の煙草工場を視るべくその事務所を訪ふた。何しろ東亞煙草といふ大立物を向ふに廻して機略縦横、半島の製煙界をあばれて居た廣江商會の主人澤次郎といふ人だ、その人は多分五十格好のでつぷり脂肪澤山の納まり返つた男だらうと拙者は想像しながら訪問した。案内されて應接室だか物置だかわからない薄暗い室にあがつて行くと、其處に一人の青年が居た。彼は厚司をきて居

た。その青年が、いとも快活な底力のある聲で『さあどうぞ、私は廣江です』と拙者を驚ろかした。實は番頭さんかと思つた其の人が主人公だつたのだ。初對面ながら相對して居ると、いやとても、煙草政策を中心に天下國家の大議論があつた。あの鼠のやうな口から湧き出て、さすがの新聞記者もだぢ／＼の體であつた。尤も『煙』にまくのは職業がら先生の手のものではあつたが。彼は當時朝日の特派員中野正剛や今は外務參與官永井柳太郎君等と親交を結び、口を開けば大陸政策を高唱して居た。野田大塊老會で彼れを評して曰く『廣江といふ男は商人にしては惜しい男たい』と。

考へて見ると吹出さざるを得ない

スケート

木戸齒科醫院 木戸 虎 藏

X

朝鮮の冬は寒い、俺の裸に暖かい國に育つたものには随分、こたえる、こんな寒い處で暮さなければならぬとは何の因果かと思ふ事も度々ある、併しどうしたものかもう數回多が来た、そして去つちまつた、寒い〜で居るゑて居るのもいまくししい、何とか此寒さに負けないで利用する事は出来ないか知らず。

考へた結果スケートを履きました、自分の仕事に差支へない時間に出て来て人數も要しない、加之多くの費用もかゝらない、そして面白いもの……こんな條件を附して見ると『スケート』に勝るものはない様です。

X

『小父さん足をそんな風にしちや駄目だよ、こんな裸にしてそれからこうするんだよ』  
『駄目々々おかしくてとても見ちゃ居られないよ、それ〜そんな事をするから轉ぶんぢやないかね』

漢江の氷上何處の小供だか知りませんが面識もない十三四の少年から僕と友人のT君とが酷評を受けて居ます。

『どうも君の言ふ様な調子にいかんね、も一度やつて見てくれ玉へ』  
『ううん成程わかつた〜こうしてこうするんだね』

去年の十二月初め頃でしたか、

京日社の多田氏とスケートの話をして寒くなつたら共に始めよう幸に諏訪湖仕込の河西氏が居るから鮮かな處をコーチして貰はふと約束したのでしたが、イザとなると出張とか何だとか事故があるものですから待ち切れずにT君と共に初めましたものゝ、獨り古の要領がわからず、コーチャー欲しやの折柄だものですからおとなしくコーチを受けて居ます、チヨコマンの癖に生意氣だとは思ひますが初めばかりの悲しさ、いくら力むで見ても初まりません。

『も少し思ひ切つて滑るんだよそんなにビク〜して居ちや百年経つても覺えられつこありやしないよ僕なんか三日目に父さんなんかよりもつと〜うまくなつて居たよ』

『此處まで来て御覧手を曳いておげるから』

遠慮なくボロ糞にこき下します弄ばれるとも知らずヨチ〜傍まで行きますと、ツイと數回一滑りに逃げちまいます、いまくししいからとつ捕まへてやらうと一馬力かけますとズデンドウと尻餅。

『アハ……此處まで御出で甘酒進上だ』

痛い尻をさすり乍ら起き上つてせめて雪塊でもなげつけてやらうとピツチングモーシヨンに移ると今度は横様にドシン〜自分乍ら

考へて見ると吹出さざるを得ない

X

痛い思ひほまだいゝとして魚傷でもしちやつまらないと思ふからか思ひ切つてやれないものですから仲々進歩しまん、然し回を重ねるに従つてどうやらこうやら滑れる様になつて來ました、タイムの力は矢張偉大なものです。

『どうだうまくなつたらう』  
あの少年に會つたらこう言つてやり度いと思ひますけれ共タツタ一度きりでどうしたのか其後會へません。

スケートの御蔭で今までは想像もつかなかつた寒い國の有難さをしみ〜と味はつて居ます。足の先に凍傷をしながらも寒さを禮讚して居ます。

網を釣る話

吉田 莊 一

京城日報校正係長の國弘翁、おツムはつんつるてんに禿けて居るが元氣は頗る旺盛、その精動振は遠く壯者を凌いで居る▲在社二十年で今は社寮列の一人、校正係長だけに色々の人の原稿を所蔵して居るが、氏が最も虎の兒のやうに愛撫してゐるのに蘇峯徳富さんの稿がある、これは同氏が同社監督時代に書いたもので、題して『朝鮮統治の要義』といひ、文章筆蹟とも頗る見るべきものがある▲之に就て面白いのは、兩三年前徳富氏の來京した時、氏は先生を訪ひ『この稿は確に自分が書いたといふことを一つ裏書して貰ひたい』といふと、先生披展一番、今昔の感よろしくあつて、直に數百言を題した、之が亦大邊な出来▲國弘翁うまく暇で鯛を釣つたとの評が高い



東京一筆啓上

朝鮮及滿洲社長

釋尾東邦

【三六】

永樂町人足下、貴下の寄書督促状を拜見する迄もなく、雑誌を寄贈されて居る厚意に對しても何か駄文を時々寄書して謝意を表せねばならぬ位の徳義心は持ち合はして居るのですが、御承知の通り筆で飯を食うて居るものは筆を執ると云ふことは一種の苦痛であるが爲め、出來得る限り餘計な筆は取りたく無いのでつい〜貴下の期待にも背くし自分の心にも背くと云ふ譯なり、然してモ一つの理由は貴下の京城雜筆と云ふ月刊雑誌は幼年文章競べで無く中老年文章競べと云ふやうな感じがする、固より碁や將棋の競伎や素人義太や浪花節の競技あると同じ意味に於て文章の競伎のあるのは當然の事であつて寧ろ高尚なる趣味の競伎として吾人は之を推奨するに吝なるもので無いが、其れとして自分自ら其競伎中の常理に加はると云ふことは、何となく氣が進まぬ、是れも貴誌に御無沙汰する一つの理由である、但し貴下の來書に曰く『一年に一度位は寄書ありても然かるべきこと』と思ふ』と云ふに至りては一種の皮肉的督促……成る程田當價のかゝつて居る雑誌を一ヶ年ただで戴いて居るに知らぬ顔をして居るのは不徳義の謂り免れぬと恐縮致し終に駄文を弄するに至つた譯です。

永樂町人足下、東京は物價は益々騰貴する一方で濱口藏相が如何に外國品に突飛な課税をして見たり節約を奨励して見ても、物價は絲の切れたタコと同然に上上にと上がる一方で頓と下がる氣配は無い、家は次に次に建てられバラツク式ではあるが殆ど震災前と同じ位の戸數になつた、市内市外に可なりアキ屋も殖えたが、屋賃は依然として下らぬ、先づ市内で疊一疊二圓から三圓四圓五圓と云ふ値段、市外でも疊一疊二圓から三圓と云ふ標準なり、市の内外を問はず百圓前後の屋賃を出さないと人間らしい住宅に住むことは出来ない、所が東京で百圓前後の屋賃の家に住むと云ふ事は月給取りなら三百圓以上、然らざるものは中産階級以上のもので無いと住まへない、故に東京人の大部分は人間らしくらざる住宅に住んで居ると云ふで善い『居は氣を移す』何うも人間らしくらざる住まいに住んで座敷に居つても臺所に居つても便所のカザをカザんで居るやうな人間に碌な人間のある筈無し、家の外は何うかと云ふと足一たび戸外に出ると雷車、自動車、自轉車に追ひまくられる、ぐずぐずすると撥ね飛ばされる、轢き殺される電車に乗つてもこつき廻はされる、版で突き飛ばされる、推される、

スラれる、斯う云ふのであるから東京人が凡て神經か尖り、短氣に險はしく、輕薄に横著に狡猾に、疑ひ深く用心深く、鬭争的になるのは當然で寛容推讓の徳に缺け、猿のやうな狐のやうな狼のやうな人間になるのも無理からぬことである、日本の首腦部東京の人間が是れであるから日本の凡ての人間も大概推知されて情け無くなる、併し東京には尙ほ江戸つ子氣分を持つて居る人間も可なりに多いやうに思はれる、其れは中流以上の社會や智識階級で無く、寧ろ中流

◆守屋さん

吉田 莊一

殖銀の守屋秘書役、高雅典麗な文章に於て、夙に一家を成して居る、渡鮮三年、その様々な新聞雜誌に書いた文稿、ざつと等身に及ぶ、そこで近くこれを蒐集し、一巻の單行本とする計畫がある、上梓發售の上は、つれ／＼草の筆者も一躍成金だらうその御披露の日の早からむことを望む。

以下の職人社會や阿兒肌の者に多い、彼等は關西者の中に見られない義侠、任侠に富んで居る、女の中にもそんなのが可なりに見出されるが、此の江戸つ子氣性と云ふものも時代の推移と共に自然薄すれ行き、關西者の輕薄狡猾の止に江戸つ子式の短氣と荒つげい所丈が残つて行くやうに思はれる。

永樂町人足下、東京は前述の如く餘まり好ましき者でも無く、東京人は餘りに好ましき人間では無い足下が住み慣れし東京に對し夙に

東京の奴等をアツと言はす丈の成算はある、所が健康も餘り善く無い上に金が第一出来ないと來ては

離縁狀を出して朝鮮入りをしたの

は先見の明ありと申すべきか、さりながら、東京は矢張東京である

可憐な奴等をアツと言はす丈の成算はある、所が健康も餘り善く無い上に金が第一出来ないと來ては

外では、京城人の俗態を嘲けるより京城人をして此に至らしむる零下二十度と云ふ寒天水地の冬の自

ぬと恐縮致し終に駄文を弄するに至つた譯です。

電車に乗つてもこつき廻はされる  
脇で突き飛ばされる、推される、

人は餘りに好ましき人間では無い  
足下が住み慣れし東京に對し夙に

離縁状を出して朝鮮入りをしたのは先見の明ありと申すべきか。さりながら、東京は矢張東京であるすき焼、鳥料理、まぐろの刺身、うなぎの蒲焼、敷そば、すし、おでん、何れも東京で無いと味ふことの出来ない料理である、到る處に軒を並べて居るカフェエの女給其れは一時間の座はり料一圓五十錢の京城藝者よりは餘程垢抜けがして居る、と云ふよりはお月さんとすつぽん位の差がある、演劇や活動や、よせを廻はつて居つても一年や二年は飽かない、又殆んど毎日のやうに開催されて居る各種の講演や演説を聴いて廻はつて居つても可なりな物知りになる、東京での出来事を其日の朝刊や夕刊で知る丈でも京城の人よりは三日計り早く賢くなる譯だ、京城で自動車で飛ばして居る役人や會社員は東京にては電車の中で八錢均一に取り扱はれて居るのだ、京城で一廉の新聞記者や文士顔をして居る連中は東京での社會上の地位は新聞配達と別に變はりはない、何處に何うして居るかとも言ふものは無い、斯う語つて來ると東京は矢張日本の都だ、男兒爲すあらんとすれば東京である、殊に若い者は石に嘯りついても東京で辛棒するに限る、奮闘止まずんば東京で幅が利けるやうにならぬものでも無い、併し松本君、僕のやうに頭が秀けた上に無一文で東京に舞ひ戻つては東京は餘り難有い都では無い、併し僕も身體さへ健康であれば何だかまた東京で一仕事出来るやうな氣もする、東京の二百萬人中、偉い者は可なりにある併し吾々より偉いと云ふ奴はさう澤山居るものではない、僕に健康と四五萬の金を持たすと半歳か一年で

東京の奴等をアツと言はず丈の成算はある、所が健康も餘り善く無い上に金が第一出来ないと來ては何時迄東京に蠢動しても頭の上がる時はあるまい、其れでも東京を見捨てる氣にはなれない、京城で如何に成功しても如何に名を成しても結局『鳥無き里の蝙蝠』だ東京の雀が笑ふて居る、殊に京城の冬と來ては、料亭の温突が最上唯一樂土であつて、東京では唾も吐きかけ手の無いやうな淫賢藝者が冬の夜の唯一の慰安者と言ふに至

りては、京城人の俗惡を嘲けるより京城人をして此に至らしむる零下二十度と云ふ寒天氷地の冬の自然界の慘酷さを呪はずに居れない(併し永樂町人足下の如き春のやうな温突で棋を戦はし、さあ飛車だ、さあ角だと旅順戦以上の激戦に凍り付くやうな京城の冬の夜を外に暮す風流人は暫く別問題として) 餘り長くなりました、今回は是れで實を塞かして貰はう、又御縁があつたら駄文を草して京城雜筆のお仲間入りをします。

素 人 の 著 書

雜 筆 書 屋 主 人

× 木下謙次郎君が『美味求真』といふ營養原理の本を著して居る。頗る評判が宜い、氏は僕の舊知である、是非一本を購つて讀んで見たらと思つて居る。

× 一事一物を一皮深く掘り下げて研究した書物は、それが何であらうと相當に尊敬されるといふことだ。今一つは近來素人筋から續々良い本が出されることだ——殊に僕は第二の點に最も感興を置いて居る

× 藤原銀次郎氏が『宴會常道』といふ書を著した、これは會て東京時事に連載されたもので、當時鳥渡ひろい讀みしたことがある。これも開があつたら一讀したい。

× 早い話が、この雜筆を出した當初など、素人側はどうしても玄人側(新聞雜誌記者)に推されるのでこの雜筆も結局新聞記者の腕比べになるかと思つたが、事實は却てさうでなく、皆さんの著眼、文章見解、いづれも玄人筋既足である

× 僕は茶道には何等縁なきものであるが、幣庵高橋義雄氏の『大正茶道記』などは、頗る興味を有つて讀んだ、亦た僕は書畫骨董に何等の趣味もないが、益田孝氏の著書は、頗る面白く讀んで居る。

× モー新聞記者が文章言論を獨占すると思ふのは、大の謬見——イヤ僕の所見に依ると、この雜筆を先づ手習草紙として、將來單行本の一つや二つを著す人は、キツト出やうと思ふ。兎に角素人時代出現文壇の社會化は、何よりうれいことである。

× そこで考へるのは、必ずしも純學術、修養の本でなくとも、苟くも

# 時

朝鮮佛教社 中村健太郎

◆ 『時は金也』と、教へられたのは、二昔も以前書生時代であつた。

◆ 學校の課題なども、時間の貴重なることを書いたことが、一度や二度ではなかつた。

◆ 少し歳を取つてから、後進のものに逢へば時に時間の貴重なることを、説いたこともあつた。

◆ 時間は、何が故に貴重であるか。吾々は、時間の貴重なることを、どれだけ眞味に感じたことがあるか。

◆ 少年時代は、言ふに及ばず、ツイ數年前でま、眞に時間かどれだけ貴重であつたか、といふと、斯く／＼の次第であるから、時間は貴重なりと、斷言するほどの確信は、實は無かつた。

◆ 何となれば、我が日常生

活の上に於て『時は金也』といふが如く、時間を小切りに切つても使用せねばならぬ程、それ程痛切に感じなかつたからである。

◆ 處が、二三年前から、私は眞に時間の貴重なることを感ずるに至つた。

◆ それが一昨年よりは、昨年、昨年よりは、今年と、一年毎に時間が貴重になつて來た。

◆ 時はどんなに貴重なのか時間が、幾らあつても足りないから、それが貴重なのだ。

◆ 否！、時は足りないのではない。時は悠久なもので足るの足らぬのといふやうなものでは、固より無いが私自身には、それがどうしても足りないのである。

◆ そこで初めて『時は金也』といふことの、眞に至言

◆ であることを、痛切に感ずる。年少時代から教へられた時間の貴重などいふことが判つたやうな氣がする。

◆ 私は、毎朝大抵五時には眼が醒める。起きて小便をしたり、顔を洗つたりしてゐると、少くとも二三十分は潰れる。

◆ それから、神棚や佛壇に燈明を捧げて、拍手を打ち日課經を勤めてゐると、此れ亦少くとも一時間は潰れる。

◆ それが終つてから、線香一本位坐つてゐると、これ約三十分は潰れる。

◆ 先輩から、努めて手紙を書け、返事は時を移さず出せよと教へられてゐるが、

◆ さてそれも中々容易な業ではないから、毎朝必ず書くことに極めてゐる。それで

◆ 毎朝手紙を書くことにしてゐるが、返事やら當方から出さねばならぬものやらで時には七八本も書くことがある。是れにも相當時間が掛かる。

◆ やつとそれを濟ませて、朝刊に眼を注いでゐると、朝飯が出来たと知らせて來

る。もう少し讀みたいナ……  
と思つても、子供等から、  
二度も三度も催促されるの  
で、その儘食卓に就く。  
彼れ此れすると、何時の  
間にか、時計は九時を指し  
てゐる。

◆  
また十時の出勤時間が迫  
つて来る。大急ぎで洋服に  
著替へてゐると、便通と催  
す。悪い癖だと家内から笑  
はれるが、永い間の習慣だ  
から、餘程直さうとしてゐ  
るけれども直らない。

宙を飛ばやうにして、全  
身汗になつて、辛つと時間  
までに、役所に駆け付ける  
と、札の上には、書類やら  
圖書やらが、山のやうに積  
まれてゐる。

それから午後五時まで  
といふものは、書類を見ぬ  
時は、電話、電話がない時  
は來客といふやうな鹽梅で  
實際時間が足らぬ。

十二時から一時までは、  
晝食の時間として、休憩を  
許されてゐるが、晝飯さへ  
もムツクリ喰へる時間かな  
い。

◆  
夕方午後五時頃に退廳す

ることもあるが六時頃にな  
ることもある。  
それから家に歸ると二三  
人は客が待つてゐる。來客  
には内地人もあれば、朝鮮  
人もある。京城の者が多い  
が、偶には地方から來るも  
のもある。

◆  
自分も何かの用事で、人  
を訪ねて、支關拂を喰つた  
時位、不愉快なことはない  
それを思ふと、假令五十分  
でも、支關に立ち乍らでも  
會つて遣りたい。

◆  
それで私は、如何に忙し  
い時でも、訪ねて來た人に  
は、タトエ三分間でも逢ふ  
ことにしてゐる。

◆  
處が逢ふとなると、五分  
や十分では、濟まされない  
ばかりでなく、應接間を有  
ため哀しさ、二時間も三時  
間も座り込まることには珍  
らしくない。

◆  
夜の時間でも利用して、  
新刊書の少しづつでも讀み  
たいと思つて見ても、二人  
からも三人からも押し掛け  
られては、それさへ出來な  
いことが多い。

◆  
況んや筆を執つて、何か  
書くなど云ふことは、容  
易ではない。故にいつも粗

製濫造となる。

◆  
其日の新聞位は、せめて  
眼を通して置かないと、時  
世に遅れると思つてゐると  
直ぐに十二時が廻つて來る  
彼れ此れする内には、午前  
の一時頃にもなる。

◆  
然し、是れは寧ろ普通の  
場合である。私は數年來關  
係してゐることが多いので  
時々役所以外のことが湧い  
て來る。是れがまた二十分  
や三十分で済む簡單なこと  
ならよいが、下手にまごつ  
くと、三時間も四時間も掛  
かる。

◆  
また當方から訪ねねばな  
らぬ要領も出來て來る。  
フーアと嘆聲と漏らす程  
時間が足りない。

◆  
若しも金があつたら、金  
で時間が買へるなら買つて  
も見たいやうな氣もする。  
『時は金也』とは、誰が  
言ひ出した言かは知らない  
が『時は金以上也』と言ひ  
たい。

◆  
繰り返して言ふ。私は、  
此頃程、時間の貴重なこと  
を感ずることはない。(大  
正十四、二、六夜)



京 徒 然 草

殖産銀行 守屋 三葉

○ 京城に割合に多きは洋行歸りなり、町には殆んど敷ふべくもあらねど御山にはざらなり、洋行歸りもかう多くては聊か一山百奴の感なきにあらず、され「今回命により一ヶ年間英獨佛に遊びその他

の小國を経て歸路は米國に廻り歸國は早くも明春三月……」など、早や新式の洋服召し給ひ御挨拶に廻らせらるゝはさぞ心行く業なるべし、靴など特に目立つも妙也、暫くは送別會に寧日なく料亭の書入れ客とあり。紅裙こゝぞと御土産をねだるに大きく「よしよしナニ願券時計……よし来た、その外希望はないか」など豪氣なものなり、先づ展墓にかこつけて郷里の田伍作を驚かし吹聴漸く一段落となれば東京に數十日滞在、大概横濱より汽船に乗り込む、この頃より曩日の威勢漸く衰退す、その何の故ありて然るか未だ經驗なければ説き難し。

○ 京城に歸らせ給ふ日頭髮の西洋風なるはよし、洋服など馬鹿に身につけてとことなく垢抜けしたるがうれし、會話の先生など出迎ふるに握手の手振りあざやかに可成流暢なる英語にて挨拶す満更捨てた場面にもあらず、十日程は色々なる意味にて妻君が目につくべし妻君が昔の娘に見え初むるころよ

り金箔漸くはげもとの李阿彌と化す、例によりてチヨツコン、チヨコマンが交りズボンの折目など跡方もなし、詠歎してのたまはく  
とてら著てあぐらをかいて日本  
説

○ 京城の電車は面白し、道路の片隅を走るが先づ奇抜なり、しかしこれには三分の理窟はあるべし、つれづれには物し難し。

車掌君の掛聲が翻譯式なるも面白し「何とかスマム」『動きまます』など手に入つたものなり、老婆など高々と行先なき尋ねつゝ腰なる小袋より又はひねりたる布切れより片道の賃金など出すもあり、口中よりよだれ交りの五錢白銅を渡すもあり、囊底を傾けつゝ四錢にて負けよなど背水の陣を張る老爺もあり、彼是する間に大方目的地につくなど妙なり。

○ 荷物は尊ばれて座席の先占權あるが如く、先客は片手間隔式に席を占むれば後よりの乗客は大方吊皮に下がるに座席よりも通路が混雑すべし、白衣の垢じみたる持てる包より何やらん汁の流出でたる珍らしき例にもあらず、こみ合ふ電車にきの子の形したる深編笠のかさばるも一景なり。

○ 寒氣凛烈肌を刺すも日陰うらゝかななるは朝鮮の冬也、北側など

【三〇】

ナマユの如く氷りて鶴ハシをハ齒が立たぬに南側など雪のあとさへ無く吹けば飛はんず土色など朝鮮の多なる哉、北漢山など南をうけて日ざしのどけきに南山など巖雪消えもやらず松の色のみ一際こきあり、仰げば一天快濶千里にっらなりて浮べる雲とても高く高なドトロリと輪を描けど伏して滿街宿雪にとささるゝを見るも妙なりさはれ北國幽鬱の自然に育ちし身にうれしきはこの日光なる哉、晴たる日曜など北側の温泉より這ひ出し二階にのぼるに縁先など硝子

◆馬野さん

平田 久雄

京畿道の馬野さんが『うき草の半生』と題する自叙傳の筆を執つて居る、紙數約六百五十頁といへば、可なり大部のものである、長い官場生活のことや、歐洲遍歴の感想やが氏一流の雄麗な筆で、縦横に描かれることと思ふ、一種の人生觀を有つて居る人として、キツト面白いものが出来やう。

越の暖氣に反り返らんばかりなるなどそとろに嬉し、子供など呼びよせ唯わけもなく喜び狂ふもよし絶へて見しことなき繪本など問はるゝまゝに拾ひ讀みつゝよき父となるもよし、妻など茶を汲みてカステラの二切三切小皿に盛りて運ぶもよし、兄さん姉ちゃんなどの蓄音機持ち出して遊ぶに美しきアルトにて『植生の宿』など漂ひ出るもよからずや。

○ コスモスの咲き埋めたる庵あり山科あたり秋雨のして

○ 汽車の窓より見る山科はよし、竹藪の茂みが中に白き土藏の浮へ

○ 世の縁の下の力持ち也、大方銀行會社の社員が如し、日と月とのみ光りて裏に大方身也、天文學者に

○ りて判ぜらる、層雲の湧き立つところにも勇氣を奮ひ、孤雲の千切れ飛ぶところに我等の悲哀を宿せり

なる意味にて妻君が目につくべし  
妻君が昔の娘に見え初むるころよ

寒氣凛烈肌を刺すも日陰うらゝ  
かなるは朝鮮の冬也、北側なご

コスモスの咲き埋めたる庵あり  
山科あたり秋雨のして

汽車の窓より見る山科はよし、  
竹藪の茂みの中に白き土蔵の浮べ  
る、柿の實の枝あらはにして黄金  
にうれたる捨て難き眺めならずや  
稲田十畝籬の松か枝に通なるあた  
り誰か世を捨てし庵なるらん、折  
柄の雨に濡れつゝ『コスモス』な  
ど柴折戸埋めて咲けり、香などき  
つゝ行ひ澄せる主忍ばれて  
露しげき山科小路はるかにも衣  
からけて尼たどる見ゆ

世の縁の下の力持ち也、大方銀行  
會社の社員の如し、日と月とのみ  
光りて雲は大方背也、天文學者に  
は御異議あらんも日と月とは萬古  
不易のしろもの也、つまりは變化  
の可能性なき老體也、雲あり千態  
萬狀秘術を盡して日と月とを引き  
立つるに餘念なし、雲なき太陽の  
いかにまふしきや、雲なき月のい  
かに寂しきや、天空の美觀かゝり  
て雲にあるを知らずや。

りて判ぜらる、層雲の湧き立つと  
ころに勇氣を養ひ、孤雲の千切れ  
飛ぶところに我等の悲哀を宿せり  
悠々三千年吾等の祖先の等しく仰  
ぎて無限の情をこめたる雲に水蒸  
氣などとは情なし。  
朝鮮は空まで寂し、大方晴れて  
雲なければなり、神経痛患者には  
よけれど、女の洋装の如く殺風景  
に坊主の頭の如く頼りなし、仰け  
ば一天空漢呼べども應へず乞ふも  
與へず、詩人悲しむに術なく哲人  
想をやるたつきさへなし、山河天  
空の美觀かくて遙に内地に及ばず

京城に住みてより三年目は早や  
異國の色にうみぬ、さはれせめて  
もの慰となるべき地に新村あり、  
京城を後にして平壤に向ふに十分  
ならずして達す、李王家の墓所と  
かやきく、老松の枝振り濼く山を  
埋むるあたり一條の小徑うねりう  
ねりて山陰に消ゆ、陵にやあらん  
温突風の庵二つ三つ日影を浴びて  
立ちたる老翁の思ふこともなげに  
松葉をかける朝鮮とは思ひ難し、  
誰が心なのすさびぞも洋館の垢抜  
けせぬが主顔なるは憂し。

われもまた鶴と一夜をあかさな  
む梅か香清く月白ければ  
柴橋をわたれば竹の門ちかく梅  
の女神の我を迎ふる  
水甕を頭にのせて高麗少女そゝ  
ろに歩むわか草の道  
貝拾ふからの少女の袖寒く彌生  
の空を白雪のふる  
郎を送る妓生の門の夕日影かざ  
す袂に柳はなちる  
めをの虎射とめし知らせけき聞  
きて郡守微笑む雪はれの窓  
鋤鉄もとらで日送る高麗人の家  
居をめぐる荒野かれ川  
むかしたてし城の樓雲をつけど  
民の煙のいとまれにして  
谷川の水さかまける岩の上に隣  
隅花さき鶴鴉の飛ぶ

早春賦

松田 甲

心なきものとは見えず朝いでゝ  
夕は歸る葛城の雲  
誰が歌ひけん定かに覚えねど、  
大和一連の平野に立ちて暮れ行く  
連山の暮色を賞でしもの誰かはこの  
擬人的描寫に敬意を表せざる、  
葛城の連山遙に路を限りて低く連  
るあたりあした朝暾に輝き夕べ落  
日に映えつゝいとも靜かに山の端  
を出で、山の端にかくれ行く也、  
春秋こゝに一千年、思ふこともな  
くて小手かざしつゝあかず賞でにし  
宮人など偲ぼすや。  
さはれ雲こそ氣の毒なれ、人の

雉子なく榛野のはてに小高きは  
國を興せしますらをの墓  
水清き谷の細道よちのほり憩ふ  
峠の石楠木の花  
古塚のそこより出てし曲玉を翁  
ものいはず伏し拜むなり  
貝殼の燈火くらき漁士が家に隣  
れ少女子やれ帆つくらふ  
奥山の静けき森の鳥の聲神代の  
歌と耳かたむけぬ  
飛ぶ鷗躍る鯨をながめゆく青海  
原の心ひろさよ  
亡き魂を弔ふ人もなき野への草  
青うして春雪のふる  
年ふりて丹塗はげたる欄干に李  
花ちり高麗からすなく  
劍とりてますらをの友舞へ歌へ  
我に酒あり肴なしとも  
天を食地を枕に我すぎむ富貴功  
名さもあらばあれ  
富士の嶺の岩屋の夢におぼろお  
ぼろ神の秘言きし夜半かな  
胡笳遠く鴨綠江の風さむみ馬の  
たてかみ雪みだれ打つ

# 靈的研究

京都神靈教主 淺岡信堂

【三三】

一夜作りに大仙人や、大道士が出来ると思はれ、釋迦や、キリストは、大した苦勞もせずに済んだであらう。

◆私は十六歳の時禪堂に入つて、座禪を始め、爾來三十有餘年間、靈の研究に没頭し、既に五年間は一切の事業を斷つて、一意専心修道に志して居るのであるが、未だ釋迦にも及ばず、キリストにも達しない。されど、無研究の人よりは何程かの自信を抱いて居る。

◆若し茲に、燒火箒を握ると云ふ先生が現はれたら、銅か眞鍮の火

◆西村さん

吉田 莊一

前の殖産局長西村さんは、大さう金を拵へたとかで、評判は餘り香ばしくない、併し根が給仕からあれ迄に纏上つた人だけに心がけには却々宜い處がある、フツツリ官海を見限つた今日悠々和歌など檢ぐつて居るが、近くその半生の詠草を集めて『つみ草』と題し、それをば舊知の人々へ贈るといはれて居る。

◆近來靈的研究が旺盛になつた京城でも種々なる先生方が飛び込んで、土地一流の人物を煙に捲いて、仙人氣取りで人氣を取つて居るやうだが、私は、この報導を見て、何とも氣の毒に感ずる、なぜなれば、腕に針を刺したり、燒火箒を握つたり、火を喰つたり、沸騰した湯の中へ手を入れたりしたのを見て、靈力の偉大さに驚くところがある。こんな事が靈的研究の一部に差加へられるのは、甚だ以て怪しからぬ。眞箇の靈的研究はそんなものではない。

◆正宗の刀や、村正の双渡りが、何が不思議なものか、私は進んで之等の種明しがして見たい。

◆こんな事は、大した修行の力でもなければ、靈妙の中へ入れる價値あるものではない。夫れよりは先づ以て、二つの眼玉が光つて居て、物の識別が出来ると思ふ點に注意して貰いたい、二つの耳が音波を享けて、言語によつて對者の心持ちが判る、即ち之が靈的の働きの要である。

◆科學と宗教とは相容れぬもの、靈は神秘にして科學の力では判らぬものと考へて居る連中は、眞理の半面を知つて、或る半面を知覺しない人だと云ひ得るのだ。

◆科學と宗教は相併行して行かぬばならぬ。要するに之を相反するものと見るのは、靈的智識の幼稚

な結果であると思ふことが出来る

◆鶏の動作を停止させるのも、頭で瓦を割るのも、一夜で出来る手品である。お客を釣込む手段としては面白く、珍奇を好む人情を利用して、多衆を引寄せるには、都合がよい、恰も、金百師が、瓦の破片を三つ計り積んで、大きな洋技で之を指示して、大聲に諸君之を見給へ、今此の瓦の破片が何に變ずるかを注意し給へと叫ぶと、通り掛りの人迄が立止まつて見物する。一人は二人となり二人は十人となり、十人は三十人となる頃迄、面白おかしくしゃべり立てるも、此邊でよいと思ふ頃、ほつほつ懐中から印刷物を出して賣つける。此等の行爲と十歩百歩で更に相異なる所はないのである。

◆靈的研究が流行し出すや、手品迄も神變不可思議靈妙の顯現でもあるやうに、見せつけて一種の營業にするものが出来た事は、國家の爲に喜ぶ事ではない。靈的研究は、吾人の生活上必要缺くべからざる大事な問題で、寸時も等閑に附することは出来ない筈である。

此の大問題が案外顧みられて居ない結果、靈的智識に乏しい人々を誤魔化して通らうとする、如何はしい連中を収めて、ヤンヤクと騒ぐのは識者の眼から見ると、同様に堪へぬ程の毒である。

靈的研究が左様に簡單に出来て、

筆を提供して見ることだ、火を喰ふと云ふ仙人が出たときは、靈液の火を興へて見るがよい。針を肉に刺しても痛苦を感じないと云ふ偉い人があれば、彼が自分で自分の肉を刺すのを止めて、第三者が針を持つて術者の身體の何れと指定をうけず、自分が思ふ所へ存分刺さして貰ふがよい、刀の双渡りをすると云ふ人があれば、錆ひた刀を持つて来て、夫で試験をさして見るとだ、之等の試験に及第する人があれば、私は一もなく、二もなく、速に上座に据へて敬意を

拂ふを躊躇しない。

◆是れは、悉く物理的眞理に立脚

ことだ、言語にも、動作にも、自ら神々しき、所謂後光のさす様な

があると云ひ、又は神奈川縣の何處かで、村長の娘を妻にして、子

ものと見るのは、靈的智識の幼稚

同種に類する種族の類である。靈的研究が左様に簡單に出来て、

る人があれば、私は一もなく、二もなく、速に上座に据へて敬意を

拂ふを躊躇しない。  
◆是れは、悉く物理的眞理に立脚して行ふ所の詐術であるから、大抵は化けの皮をさらけ出さずには居れない。

◆催眠術を知つて居る人は、對者を信ぜしむることに依つて、己れの意の儘なることを知つて居ます。手段を用ひて、催眠的狀態に陥れるのを、手段催眠と稱へる、多くは此の種の人である。そして小利巧に哲學的の用語を用ひたり宗教學的の用語を挿さんだりして對者を信ぜしむるのである。  
◆眞に靈を悟り、靈的に語り、知覺の道に入りつゝある人は、言語よりも行住坐臥の動作に注意する

ことだ、言語にも、動作にも、自ら神々しき、所謂後光のさす様な調子に觀するのでなくてはならぬ口に正道を説きつゝ、蔭に於て、酒や女に氣を取られる様な輩は全く閉口……。

◆私は前にも言つた通り、至徳の器ではない、然し靈的研究三十有餘年の賜は、靈術者の種明かしと靈徳者の眞偽を見分けるだけの智識は持つて居る。

◆若し茲に、京城人士の御希望もあらば、何時でも出張してお話が見たい。旅費も謝禮も御配慮を受けるものではない。希望者は席場の設備と、聴衆の若干をお集め下されば足る。

### 兄 歸 る

朝鮮鑛業會 徳野眞士

私はもう一年餘り内地の土を踏まぬが、家妻は展墓旁々私の郷里に行き、此頃は別府で、雜筆にはお馴染みの、川本村風子哲論居士夫妻や、二三の知れる人々と、梅は散つたが、椿の花が美しくとか、幾ら降つても少しも積らず、別府の雪は本當にたよりない等と、呑氣な便りを寄越して遊んで居る。

の姉に見せたら、これも一方ならず驚喜して居る。

◆私に、それが羨ましいとは思はず、書生と二人で神妙に留守をして居る。所が本日その家妻から『友吉成功した御坊より來る』との電報が來た。此電報には流石の私も驚いた、早速附近に居る妻

話をせねば判らぬが、私の妻は幼時父を亡ひ、米國にある兄の仕送りを受けて母と二人で暮らして居つた。其母は彼が學校を卒業した十六の歳に、紀州の御坊町から京都に行く途中、船の中で頓死した又米國に居る兄も一昨年排日問題の成行きを心配し乍ら彼方で客死した。今一人友吉といふ兄のある事は聞いて居つたが、それは二十年前も前に、家を飛び出して行方知れず、母が死んでも兄が死んでも歸つても來ねば、通知する事も出來ず。或は臺灣に居るのを見た人

◆別府たより 高木背水  
その後は御無沙汰……私は寒くなると足部の方が悪く、植村博士の勸告に依り一月十二日から入湯、成績良好で毎日足を暖めてから散歩し歸れば亦緩めて居ります、昨今大に恢復大作に取懸つて居ります、朝景や暮景の面白いのにも再三出會、副産物の小品は相當に出來ます、歸城の上は先づ貴社に紀念小品を贈呈したい。(二月六日)

◆私に、それが羨ましいとは思はず、書生と二人で神妙に留守をして居る。所が本日その家妻から『友吉成功した御坊より來る』との電報が來た。此電報には流石の私も驚いた、早速附近に居る妻

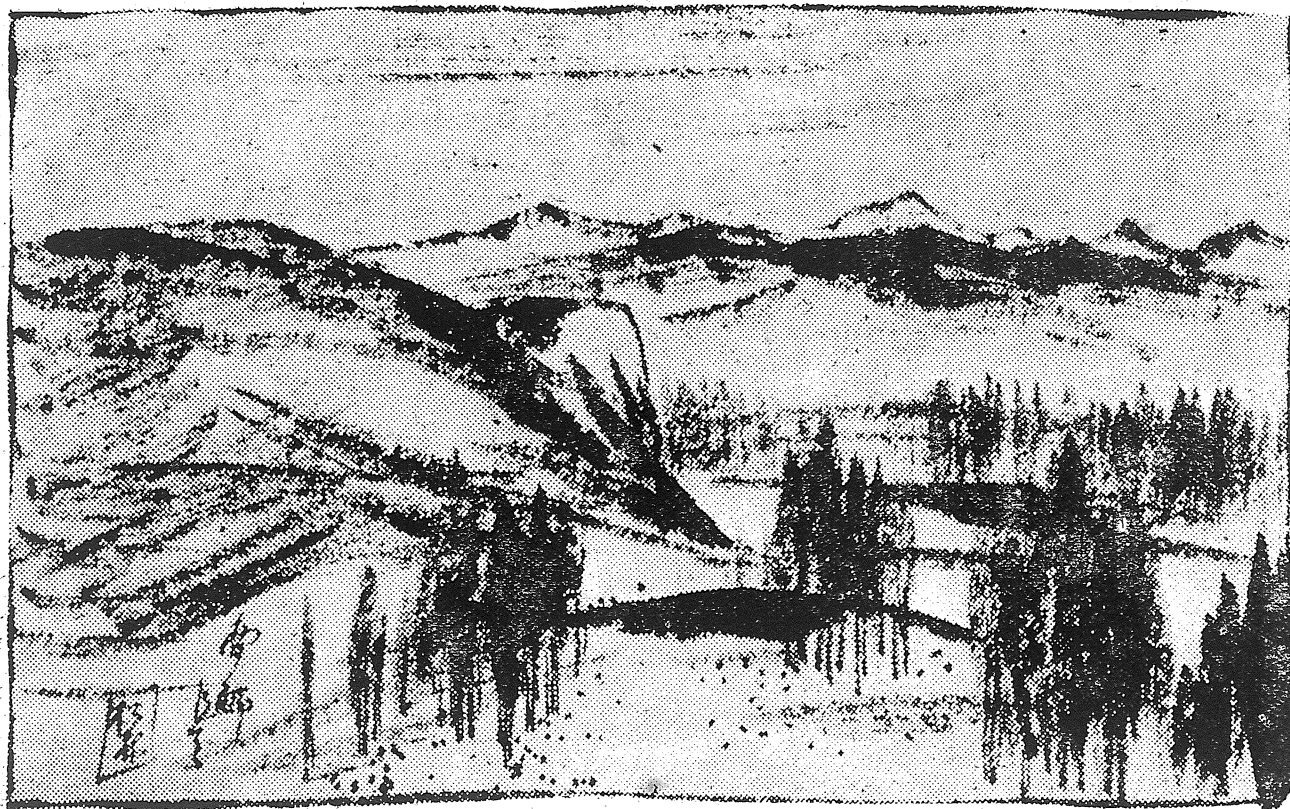


京 城 雜 筆



雛 祭 三 戶 萬 象 氏 筆

筆 雜 城 京



南 鮮 に て 加 藤 松 林 氏 筆

# 古筆の觀賞

—伊豫切の紹介—

東 拓 志 村 春 方

【三六】

つたのは、學界のために、喜ばしきことであらねばならぬ。

伊豫切は御物朗詠集と同筆で、初めて古筆研究の門に入る者にとつて、手頃なものである。そこで私は、もう少し進んで伊豫切を薦める理由を書かなければならなくなつた。

前に述べた、伊豫切と同筆である御物朗詠集と云ふのは、帝室の御物になつてゐる、傳行成筆（實は筆者不明）の朗詠集の謄で、尾上博士も古筆研究者入門の書として推奨されてゐたもので、古筆研究の基礎をなすものであるとされてゐた。然るに、今度の伊豫切と御物朗詠集を比較するに、前者の寧ろ後者に勝れるものあるを發見するのである。一寸お断りするが私が今比較したのは、コロタイプ版になつた、吾々が手にすることの出来る、習字本としての兩者の價值批判で、無論、原本の比較ではない。御物は完本で、これは端本であり、また同筆である以上、原本の優劣は比較する方が野暮である。今、私が手本として伊豫切を勝れりとする理由は、御物朗詠集（宮内省藏版帖仕立二冊本）はもと宮家の習字手本とする目的で坂正臣氏が監督の下に、實物を聊か拡大して、精印に附したものである。拡大した理由は、習字本としては、その方が便利であらうとの意見から、なされたものであらうが、結果は、皮肉にも反對になつて現はれ、少しく弱々しい感じと、淋しい感じがするものとなつたのである。弱々しさと、淋しさこれは習字本としての缺點であらねばならぬ、私の友人で本筆を愛好するの餘り、この缺を除かんとして、態々、これを原寸に縮寫し

私は、書道、殊に和様書道、更らにくだいて言へば、上代様の草假名に興味を持ち、このためにはかなり永い時間と、苦しい生活の内から、私にとつては、少し無理な經費を費さしめられた。こんな關係から、時折、『假名の研究をしたいが、どんな手本から始めたい』でしやう』と相談されることがある。私は、その都度『サア』と言つて、後の返事に窮するものである。と云ふのは、私がお薦めする手本は、丁度、絶壁に咲く花のやうに、眺めるだけで、手にすることが困難であるからである。いや、眺めることさへ、出来ない場合が多いからである。

古事研究者、草假名研究者の、どうしても手掛けなければならぬものに、傳道風筆本阿彌切、同繼色紙、傳貫之筆高野切、同寸松庵色紙、傳行成筆古今集、同助詠集三種、傳俊頼筆古今集、三十六人集など數へ来れば、いくらもあり、何れも、運綿遊糸の繡美を恣にした、稀世の逸品であるが、悲しいかな、容易に手にし難いのである。しかし、骨重的に愛玩するに非ざる、習字家の目的としてはこれ等の復寫本で満足しなければならず、復寫本であれば、價は、

二十圓位から、たか／＼三百圓位までのものであり、肉筆ものではない限り、支那の古法帖ほどの高價ではないが、それが又、何れも、或る特殊な好事家の出版に係るものが多く、部數が非常に少く、一般愛好者の手に入りにくいのである。そのため、折角の發心もそのまゝ立消えになる者が多いのは、如何にも残念であつた。去りとして、千蔭や松花堂、又は、豫樂院などを勧めることは、私の德義心が許さないで、今日までこの残念さを幾度も繰返した。

この月初めに、東京の一友人から小包が著いた。開けて見ると、思ひかけない伊豫切である。實は伊豫切を見るのは、今度か初めてであつた。私の眼と心は恰も吸はれるやうに、その紙面に注がれてゐた。そして思はず歎聲を洩したほどに、魅せられてゐた。爾來、私は同好者の逢ふ人毎に、この書を薦めてゐる。安心して、いや、喜び勇んで薦めてゐる。

伊豫切とは、松平家所藏の朗詠集のことで、同家の好意から、これをコロタイプ版にして、原本の味ひが遺憾なく感得される精巧な美本に仕立て、同好者に分ち古筆愛好家の隨喜するところとな

て、手本としてゐる者もあつた。然るに、伊豫切は實物大で、而か

も持つてゐない。寧ろ、これから本當に、古筆の研究に著手される

しかし、伊豫切も、やはり、好事家の出版であるから、何れは絶版になつて、再び手に入りにくい

これ等の復寫本で満足しなければならず、復寫本であれば、價は、美本に仕立て、同好者に分ち、古筆愛好家の随喜するところとなして、態々、これを原寸に縮寫し

て、手本としてゐる者もあつた。然るに、伊豫切は實物大で、而かも、精選した料紙を用ゐるため、艶麗な書風の内に、充分な筆力と、肩すべからざる氣品に、加ふるに古淡な筆韻までが、遺憾なく味へるのである。この點が、私の伊豫切をお薦めする所以である。

も持つてゐない。寧ろ、これから本當に、古筆の研究に著手される人々に對して、大なる期待と興味を持つ者である。それは、絶壁の花と眺めてゐた、平安朝全盛期の諸作品が、コロタイプと云ふ文明の利器によつて、追々と吾々の手にも入るやうになり、現代諸大家の修業時代に比し、より豊富なる資料を、提供されるやうになつたからである。

しかし、伊豫切も、やはり、好事家の出版であるから、何れは絶版になつて、再び手に入れにくいものになるであらうことが、懸念される。なにも、出版者の提灯を持つわけではないが、今が、絶好の機會である、敢て同好者に對し紹介と共に一本をお薦めする。實費八圓(要送料 納入の美本である。東京市下谷區御徒町三ノ七〇 小島甫氏が取次をするそりである。

月 百 首

李王職 末松熊彦

港 月

さしのぼる濠入江の夕汐に

うつらふ月も滿ちわたりけり

津 月

都べに詠めしよりも難波津の

舟楫夜半の月ぞおかしき

磯 月

あら磯の松の根枕さよふけて

都こひしき月を見るかな

島 月

さすらへる人は何とか眺むらん

隱岐の小島に更くる夜の月

沖 月

ゆるされば沖つ鹽風立つ浪を

打出る月もしづかなりけり

迫 門 月

渦巻きて流るゝあはの鳴戸にも

月影のみは沈まざりけり

離 月

音なきくひよきの離も風なきて

汐路はるかに月すみ渡る

つ み 草

西村保吉

○

大正十二年十月三日、大同江の鮎、大

屯山の猪肉など夕餉の席に供へ、京城

神社の神饌の餅をもて雜着などつくり

てたふべければ、東京の家族等は震災

後の今日如何なるものを食ふへ居るや

などおもひて

何事も乏しかるべき旅に居て

何をかはめる味と吾子とは

足らはぬを常と思へば足る時も

足らぬ隣にて過すべきなり

○ 秋園の殘花をとりそろへて東京の裏に

送るとて

庭のべに咲きこりたる秋草の

花のかぎりを妹に見せばや

○ 折にふれて

心あらば枯れにし花を見る人の

心の中に香は白ふらぬ



# 桂杏會の記

京城婦人病院院長 工藤武城

佛蘭西留學中の話である。或日同じ婦人科に勤務する同僚ブールニエ君から一通の案内状を受取つた。夫は巴里のリユ、ツ、サンゼルマンのサロンに於て、アスソシアシオ、ツボーザルト、レ、メゾサン、まあ譯して見ると醫界美術會とも云うか、其繪畫展覽會のワニシユマンを見に来いと云ふのである。ワニシユマンとは本來繪畫面にワニスを塗る事であるけれども、今では公衆の縦覧を許す前日に、其會に關係ある人が、高位高官連を案内して其批評を乞ふ日のことである。

醫者の繪と云ふのであるから、頭から馬鹿にして、一向氣乗りもしなかつたし、二つは又、近來の佛蘭西の畫風が著しく邪道に逸してお化けの様な物計りだから、又例の初生児の胎便を、精神病患者が無茶苦茶に荒布に塗廻はした、樂屋落の獨好がりの繪を見せつけらるゝに相違ないと、頗る恐怖したけれども、折角の好意を無にするのも本意ないし、且つ元の總督府醫院長の次男で、佛蘭西美人と家庭を作り、今では同國繪畫國展の唯一の外國人審査員たる、巴里藝術通の藤田君も萬更でないといふし、多少の好奇心も手傳つて、散歩がてらに見に行つた。

サロンに到着して第一に驚かされたのは、門前に數十の自動車がある。

事はずいぶん必要なる事と思ふ。機運は遂に熟した。此度京都臨濟大學教授にして且つ南畫界一方

整列して、當時の大統領ポアンカレ、總理大臣ドクトエル、クレマンソー、内閣諸大臣、各國大使、知名の學者、政治家、就中リユ、ツ、ラメヅシンは殆んど總出で、巴里の主なる人達か、家族同伴で來て居るでは無いか。然かも男子——は盡く燕尾服に絹帽貴夫人令嬢は皆花の如きスアレーの盛装である。願れば小生は著古しの七つ下りの背廣の儘である。

引返そうか、夫れとも一應下宿に歸り著替へて出直そうかと思つたが、まゝよ、旅恥播却だ。問題にでもなつたら、元の京城府尹三浦彌五郎君も現に大使館書記官で居るし、京城總領事のバイヤル君も賜暇歸國中で巴里に居るから、何とかして呉れるだらふと冀度胸を極めて、支番に案内状を示して雜間に粉れてサロンに流れ込んだ入口で受取つた出品目錄を見て又驚いた。自分の知つてる醫科大學の教授は大概出品してる。市中開業の主なる病院長の名も見へる中には教壇に立つて澁面計りでも美術などが分るものかと思ふ様な、紳科學者肌の教授の名もある。

扱て彌々出品畫に當面して又々驚いた。現代佛蘭西のやれ未來派だ、やれイムブレスシオニスムだと、無暗に新しがる醜術の中に、屹然として時流を抜き、溫雅にし

なる境地にありて、物我一如、紙上唯頌々の聲より生れ出たものがある。

て穩健なるラテン系の正脈を傳へて居る。エコール、ボイザルト派や、サロン派や、ヒユハツリスム派の畫匠連に佛國美術の正脈は傳らずして、反て醫學者の餘技たる此中に眞正の衣鉢が傳つて居るのでは無いかと思つた。

最も出品は醫師に限つたのでは無い。其家族も出品して居る。大は一番のカンパスもあれば、オクターブ形のカリカツールもある。何れも匠家の紛々たる臭氣がなく、素直な清鮮な氣に満ちて居て久し振にあこがれの久渴を醫したファイガローヤル、マタン紙等にも巴に本年の醫界美術會の豫報を頻々として掲載して前景氣を煽つ

さす潮につれて沙魚はものぼるらん釣する人の磯になみ居るたちまちに空をおほひぬ黒雲の鳴るいかつちを雲に潜めて

◆さす潮

中谷桂谷

て居る。本年も來る三月八日から三月二十日まで二週間、巴里サンゼルマンのサロンに於て開會するそうである。然かも本年からは、從來醫師及其家族に限られてあつたのを、更に擴張して齒科醫、獸醫、藥劑師、産婆及其家族迄も出品し得る事に改められたそうであるから、定めて盛會であらう。

日本にも、責めて京城にもこんな會があつたらばと思つて居た。醫師の天職として、痛い、痒い、苦しい、惱ましひ、と朝夕訴へらるゝのは盡く世間の暗き方面のみである。従つて其心機を一轉して更に明日の力を養ふべく、詩、畫の如きに因つて其精神を慰める

吾輩縱非文墨伍。筆端觸處見春風。同次 體詩論畫意相通。筆墨縱橫酒氣中。比日歡迎賓客至。淺新却發古之風

サロンに到着して第一に驚かさ  
れたのは、門前に數十の自動車

だ、やれイムプレスオニスムだ  
と、無暗に新しがる醜術の中に、  
屹然として時流を抜き、温雅にし

である。従つて其心機を一轉して  
更に明日の力を養ふべく、詩、書  
畫の如きに因つて其精神を慰める

事は實際必要な事と思ふ。

機運は遂に熟した。此度京都臨  
濟大學教授にして且つ南畫界一方  
の重鎮であり、支那に於ては周之  
易、水華山人の正脈を繼ぎ、日本  
にありては岡田半江の衣鉢を傳へ  
たる迂禪、平野天桂老師の來城せ  
られしを、強めて一年の留錫を乞  
ひ、其門下にして、醫學界に籍を  
置ける同人により組織せられ、一  
ヶ月一回、第三水曜に各々其作品  
を展覽して、互に相批評するの  
此桂香會である。曾て本誌に寺尾  
公天氏の麗筆に因て報道せられた  
擔板會の姉妹會である。

會員の顔觸は志賀潔閣下、池田  
季雄君及其令嬢、中島貞信君、宇  
野宗一君、金井豊七君、江頭富雄  
君及同夫人、安東貞一郎君及其令  
息夫人、佐藤伊藏君、衣笠茂君、  
久枝秀喜君及同夫人、久保田經義  
君、小生及豚妻を加へて都合十七  
人である。

尙ほ久保田天南君を中心とする  
木石南畫會も兩三杏林界の名士あ  
り、總督府醫院及び京城醫學專門  
學校には高木背水君に師事せる一  
團ありて、時々展覽會を開き、精  
神科長の水津君の如きは、已に『  
病院の五時』を出品して鮮展に入  
選の榮を荷つて居る。何れ此等の  
諸團體を打て一丸として、遠く巴  
里の醫師美術會に拮抗したらば愉  
快であらふ。

扱て吾桂香會は人間本來の心地  
に即して翰墨の境界に遊戯し、巧  
拙を超越し、時流を趁はず、寂照  
圓明、虛實明暗、山となり溪とな  
り、雲となり水となり、太虚の風  
光に坐し、都外の靜寂に遊ぶのを  
第一義とする。其作品は各個人性  
が、自己の本來に歸つて、心頭は  
白雲の如く閑に、潭水の如く冷か

なる境地にありて、物我一如、紙  
上唯颯々の聲より生れ出たもので  
ある。

- 一月の桂香會は互選の結果  
一等、青綠山水、衣笠祥窓、  
二等、水墨晴竹、池田桂鳳、  
三等、淡彩春蘭、中島桂谷、

序に當夜の席上吟を御披露：  
第五回桂香會席上口號、學鷗

驚看筆勢與神通。興動燭光爐氣中  
休道峭寒猶徹骨。墨香滿坐起春風

同 次 拏 雲

牀頭坐覺暗光通。一幅描成談笑中  
淋漓墨痕春色動。梅花恰似促春風

同 次 隈 川

桂香同門意氣涌。詩歌彩管發斯中  
一堂三伯試裁翦。清興添來起春風

同 次 桂 州

詩情畫意互相通。歡樂悠悠在此中

### 身邊雜記

雜筆書屋主人

咸北雄基の友人から一雜  
誌を送つて來た。

あけて見ると『雄基雜筆』  
』といふ誌名で、土地の人  
々の詩や、俳や、歌や、感  
想文などが載せてある。

いふ迄もなく、わが京城  
雜筆に擬して『雄基雜筆』  
が誕生したのである。

私は、それを手にして、  
淡い喜びを感じた。

○  
雄基雜筆は、餘り文藝し  
みて居る、私がこの雜誌を  
遣つてゐるのは、目的に於  
て、大分、だたりのがある。  
併し、悪いことではない  
私は平壤にも、大邱にも、

吾輩縱非文墨伍。筆端觸處見春風

同 次  
讀詩論畫意相通。筆墨縱橫酒氣中  
此日歡迎賓客至。歲新却擬古之風

同 次 擔 雪  
正流脉々各相通。南法汲來硯石中  
墨樹筆花饒有致。滿堂掩映起春風

同 上 拍 梁 吟  
喜見彩霞浮曉天。桂洲

遠峰轟々橫雲煙。桂窓  
梅花魁春暗香傳。擔雪

詩情畫趣興悠然。桂谷  
白雪茫々山嶽連。桂石

俗中學仙樂山川。桂林  
欲握酒權又詩權。南山

詩畫無成搭酒船。隈川  
酒到耐時快新年。米城

欲學左相椒酒新。三桂  
笑聲滿堂安就眠。桂鳳

林樹雪晴寒月圓。拏雲  
風流與興界三千。學鷗

それ／＼の雜筆が起ること  
を願ふ。

○  
日本人は、講演したり、  
文章を書かないから、事物  
を觀察しても、粗雑を免れ  
ない、亦た多少の意見、觀  
察があつても、口述し、記  
録するといふ覺悟がないか  
ら、それを體系的にまとめ  
ることが出来ない、それ故  
断片的の話は出来る、併し  
筋の立つた意見は吐けない  
どうしても日本人は、物  
を書かねば駄目だ、總て書  
くことになれば、何を觀察  
しても、讀んでもモ一少し  
組織的なあつかいをするこ  
とになる。

○  
日本人ぐる非學者的生  
活を、平氣でやつてるもの  
はないと思ふ。

東京初のぼり

奉天 廣江澤次郎

【100】

つた様な顔もしない、元氣な兄きは浴槽へ飛込もうとした刹那ヒヤヒヤと悲鳴を揚げて飛出し、フワフワ熱いなあ、オイ番頭！水おくんな水を！と立続けに怒鳴つて仁王立、私は百萬の味方を得た心持で見きに加勢し、ヤーツと一分間程場に浸りホワホワの體で逃出した。

爾後幾變轉、間借して自炊を始めたが仲々此間借が六ヶ敷い、第一私の條件が喧ましい。

◆毒氣を吐く

平田久雄

大阪前日の井上收氏から、その近著『毒氣を吐く』の御寄贈をうけた、著者は、好んでその毒氣を吐き、そして得々自ら足れりとして居るらしいが、先づそれはそれとして、立派に一家の風格を具へ、奇才縱横といつた處がある、おもしろい本でもあり、痛快な本でもある、弘く讀書界に歡迎せらるゝことと思ふ、本は市内大阪屋號に求められたい。

一、間代安値なる事

二、家の主人親切なる事

三、閑靜にて小奇麗なる事

容易に全部の條件具備しない、隨て二三ヶ月毎に柳行李に机、ランプ、帶、土鍋、コンロ、炭俵等を車に積んでゴ轉宿！家外變り榮えのあつた處もあれば替つて散々失敗した事もある、一ト晩で飛出したと云ふ珍無類の傑作もある、茲に號外附録として序に自白に及ぶ。

◆

芝區田町のトあるランプ屋の二階

銀座通りの繁華、都大路の雑踏に肝を潰し乍らノコ々々友人の宿へ柳行李引早いで押懸けた、幸ひ友人は在宿私は一部始終を語り意氣軒昂「男子立志出郷關、學者不成死不還」鐵の如き大決心を表明した、友人は委細を黙然聞き終つてから諄々と私の上京が無謀であつた事から仲々苦學の困難な事などを詳細に語り劈頭私の下胆を抜く段々語るを聞けば聞く程私は何だか鐵の如き決心がグラツキ始めた様に感じ又秘藏の六韜三略虎の巻が急にアテにならぬ様な氣がして心細い事夥だし。

友人の勧むるままに風呂に行つた相客は誰も居なかつた私一人だつた、豫て田舎に居た時から東京の風呂は熱い、江戸ッ子はユデ蛸の様になるのを江戸前氣分の發露と覺ぶと聞いて居たが、イヤハヤ此風呂の熱さ驚くべし、道がに東京の風呂は熱いや、併し私は田舎者と見られるのが辛さに躰下丹田に力を込め浴槽に飛込もうと幾度か決心し幾度か企てたが其熱さ並大抵に非ず、友人には苦學の困難を吹込まれ！風呂屋では此熱湯に直

面し鐵の如き決心のグラツキが又餘蘆を始めた、丁度其所へ鼻唄で若い兄きが元氣よく素裸になつて遣つて来た、私は田舎者と見られまいと精々元氣な虚勢を張り熱か

人一倍求學心と成功熱の熾烈であつた私は、十六の時に親兄弟の世話になるかい、親類だなんて糞の役にも立たぬ者だ、東京では一文なしでも立派に勉強が出来る途があるわいと許りに大氣焔で郷里を飛出した『東京苦學案内』が當時私の六韜三略虎の巻であつたこそ笑止千萬とでも申すべきか、呵々

雲表に響ゆる名古屋城、榮光あらしめ給へと祈り捧ぐる熱田神宮、岡崎御油の舊宿場、廣瀨清澄の濱名湖、仰ぎ見る驪峰富岳の莊嚴、紺碧の波も靜かな駿河灣、關東關西を兩分する箱根の峻嶺、北條早雲を偲ぶ小田原、松林中に點する大磯の別荘、男波女波の來り戯るるに任ず天狗岩の邊り、渺茫たる青海原の相模灘を黒煙を吐き駛る巨船、七里ヶ濱や繪の如き江の嶋其他湘南の名邑勝地指呼の裡に展開し來る、此バノラマの如き變化する沿道の風光に憧憬れ赤切草の少年たる私は一睡もせて其送迎に忙はし。

新橋に到着し人波に揉まれ乍ら驕から吐き出される、オホンと許りに急造の江戸ッ兒「だからネ」とか「行かッネ」とか言葉使ひにも細心の注意を拂ひ精々田舎者らしく見られぬやう人知れず若心する

を借りた時であつた、眼下に見下る芝區川邊、暮末の昔々偲ぶお臺

た、ランプ屋の親爺も苦笑して又御縁があつたらとお世辭を云つた

の情に堪へぬ。 朔北の寒風吹き荒む夜、哀れ氣に



か「行かす」を言遣ひのにも  
細心の注意を拂ひ精々田舎者らし  
く見られぬやう人知れず若心する

老いなきが元氣よく素直になつて  
遣つて来た、私は田舎者と見られ  
まいと精々元氣な虚勢を張り熱か

芝區田町のトあるランプ屋の二階

を借りた時であつた、眼下に見下  
ろす品川灣、暮末の昔々偲ぶお臺  
場、隠現する眞帆片帆の漁船、黒  
煙を吐き航走する房州通ひの汽船  
飛交ふ白い鵜の群れ、繪の如き此  
風光大いに氣に入つた、間代も條  
件に叶つて居る、只疊が古色蒼然  
たる丈けが不足だが警澤は申され  
ぬ、早速荷物を運び込んだか之が  
大失敗とは神ならぬ身の知る由も  
ない。

夕方一と風呂浴び一時間程散歩し  
て歸り勉強し始めたが燭んに蠶が  
出勤して妨害をする、二時間程の  
間に百疋程ヒネリ潰したが敵は後  
續部隊を派し頑強に抵抗する、勉  
強中止！私は降参して寢床にもぐ  
り込んだが餓えたる蚤群は猛襲續  
行、私は防禦に疲勞困憊した十二  
時と過ぎ一時となつたが勇敢なる  
蚤群との激戦は止まない、敵の死  
屍累々たるも全滅處か刻々兵員増  
加！私は愚かにも須らく敵の本據  
を衝くべしと許りに跳起き向ふ鉢  
巻で疊をめくり始めた、そうして  
疊の下即ち床を掃き出した、處が  
丁度直ぐ其下の坐敷で寢て居たラ  
ンプ屋夫婦吃驚仰天肝を潰して居  
る、深更丑満頭二階でドタンバタ  
ンやられ雪降る如く頭上に埃を浴  
びせ懸けられたのだから吃驚仰天  
するのも無理はない、其内に下で  
は夫婦喧嘩を始めた耳を澄して聞  
けば親爺は二階へ談判に行けと嚴  
命するが嬢は服従せず親爺が行く  
のが當然だと抗辯しとる、私は洵  
に氣の毒な事をしたと思つたが後  
の祭だ、ソーツと疊を元通りに納  
め靜に寢ようとしたが蚤群は復讐  
戦と許りに一層活躍し東天ホノボ  
ノと明ける頃迄私は蚤に苛められ  
た。翌朝早々事情陳辯他に轉宿し

た、ランプ屋の親爺も苦笑して又  
御縁があつたらとお世辭を云つた

◆  
今は是も二十有餘年前の昔話とな  
つた、思へば光陰流水！轉た懷舊

の情に堪へぬ。  
湖北の寒風吹き荒む夜、哀れ氣に  
驛馬の嘶く朝、波瀾重疊たる前半  
生を回想し私は思はず戎衣の袖を  
濡らす時もある。

偶 感

京城醫學教授  
醫學博士

佐藤 剛 藏

松本サンから態々社員を  
派し、何か是非書くやうに  
との御勧めで不取敢ナグリ  
書きをやつて見た。

努力あるにも係はらず其事  
情の内地に知れて居らぬこ  
とはマダ驚くべく豫想の外  
にあるのではなからうか。

私の友人で神戸に開業し  
て居る人が本年一月早々不  
幸逝去せる報を受た、早速  
悔状を出したところが其謝  
禮の封筒に韓國京城と書い  
てあつたので頗る恐れ入つ  
た、神戸アタリに居るもの  
で然かも中以上の身分の家  
でもマダ日韓併合己に十五  
年を経過して居るのに朝鮮  
をマダ外國と同様に心得て  
居らるゝといふのは何とい  
つても恐縮せざるを得ない  
内地に居る大部分の人は明  
治二十七八年の日清戦役の  
當時か新しくて明治三十七  
八年の日露戦争の時代の話  
がマダ先入主となつて居つ  
て矢張り朝鮮を昔のマ、の  
未開の地と見て居るやうの  
人が多いのではなからうか  
朝鮮事情の宣傳に就ては久  
しく一般在住者の非常なる

醫學方面なども明治四  
十二年頃は朝鮮人の子弟  
を醫者にして役に立つたら  
うかといふやうなタヨリの  
無い議論が多かつたホド幼  
稚であつたやうだ、然るに  
時代は進歩して今や醫者も  
内鮮人共學となり醫學専門  
學校の設置は勿論更に明年  
四月京城帝大醫學部が開か  
るゝやうの大勢になつた、  
驚くべき進歩といはねばな  
らぬ、醫學部の外に法文學  
部を總合する京城帝大新設  
は自ら朝鮮事情を知らしむ  
るに至適の措置であるであ  
らう。

アメリカあたりでは京城  
(セウル)は東京と相並ん  
で話題に上るといふ、朝鮮  
事情は内地よりも知つて外  
國に良く知れて居るのでは  
なからうか。



縁

談

京城日報社 伊集院兼雄

かりそめにも私のやうなものに  
據を世話してやらうと言ふ親切  
な人の話である。

Sと言ふのは昨年あたり刑事を  
罷めた人である。つまり刑事上り  
の男なのである。至つて氣のいゝ  
元氣な男で刑事時代から極く懇意  
にしあつて居たのだが、刑事を罷  
めて警察を去つてからは滅多に會  
ふ機會がなかつた。時々道で出遇  
つても

『景氣はいかゞ?』  
と言ふ位の所で別れて仕舞ふ程  
度で格別深い交際もしてなかつた  
が、最近のことである。

或日電車の中で、而もたつた一  
息の木町線に乗り替へた黄金町か  
ら終點迄の電車内で、そのSとば  
つたり出會つたのである。電車は  
走り出した。ゆつくり話す間かな  
いから、と言つた風にSはいきな  
り私の耳と眼を引張るやうなそぶ  
りで身體を擠り寄せながら

『一寸君、君やまだこりやない  
んだらう?』  
と私の耳に囁いてSの右の手の  
小指はもの言ふやうに私の眼の下  
で動いて居るのである。餘り突然  
なことなので答へるすべからな  
かつた私は辛うじて

『いや……』  
と首振りながら笑ひにまぎらし  
たのであつた。するとSは待つて  
居たとばかり二の句をついだ。

『君に世話してやらうと言ふい  
ゝ女があるんだが、貰はないか  
ね』

私は益々狼狽せざるを得なかつ  
た。それもその筈、丁度その朝の  
ことだ。前夜郷里から妹を伴れ歸  
つたばかりの所に起つた面倒な問  
題で随分頭を痛めて居る最中、そ  
れにまだ考へてもないことを突然  
聞かされたからである。

『そりや有難いが、僕はとても  
まだく』  
私はやつとこれだけ言ふことが  
出来た。

『どうしてかね』  
『とても今の僕には問題になら  
ん話で……』

私はSの簡單な言葉の中に本氣  
で言つて居ることをみて愈々驚き  
ながら自分も眞面目にさう答へた  
のだが、Sはもうすつかり呑み込  
んだと言ふ態度で

『まあ、僕に任せとき給へ、  
うまい工合に進めるから』  
と言ふのに私はもう抗辯する氣  
勢がなかつた。そしてさうしたS  
の言葉は妙に私の心を引摺つて行  
くのだった。

『一體先方の女はどんな性質の  
ものですか』  
と私は興味をもつて聞いたのだ  
『なに、さう大した身分ではな  
いが家庭の事情で早く片附けね  
ばならなくなつたし丁度君にい

「だらうと思つたから實は四五  
日前から君を探して居たんだ。  
然し斷つて置くが向ふから澤山  
な持物をつけて來ることは出來  
ないだらうからな』

電車が此時終點に著いたのでS  
はさう言ひ下り降りた。  
『いや、そんなことは構やし  
ませんよ』

と私はまるで乘氣になつた積り  
で答へた。

『ぢやまた君の社の方に電話を  
かけることにするから……君は  
京日だつたんだね』  
さう言ふSの言葉を最後にその

◆ おもちや  
平田久雄

人間には見かけに依らぬいろい  
ろな道樂があるのでおしろい▲  
大塚内務局長はゴルフに凝つて  
居るが、この外にも玩具といふ  
道樂があるらしい▲而かもこの  
方はゴルフより遙に遠く、遙に  
博くやつてるので、仲々精通し  
たものだとの世評。

日は別れたのである。  
それから四、五日たつたがSか  
らは何とも言つて來なかつた。自  
分から尋ねて行く程に進んで居な  
いし、それきりで十日もたつた或  
日偶然裁判所の前でSと出會つた  
のである。私の顔を見るや否や  
『一體、君やどうしたんだね』  
ぶつきら棒に『しゃうもない奴  
だ』と言はんばかりにSは苦笑ひ  
しながら言ふのである。

『いやどうも御世話様で……』  
と言つた私は手持無沙汰だつた  
『その女と言ふのは君を知つて  
るんだよ、そして親達も知つて

るらしい『足が悪いのはどうし  
たらだらうかと言つてたからあ

と言ひかけたが止して私は前に  
言つたやうな言葉を笑ひながら繰

臺車會社の立派な寢臺車を連絡せ  
るは氣持よく候、夜中に劍を帯び  
たるロシヤ人三四人車内を巡視す

たのであつた。するとSは待つて居たとばかり二の句をついだ。

「た、...」と、たが身分でないが家庭の事情で早く片附けねばならなくなつたし丁度君にい

と言つた私は手舞無沙汰だつた『その女と言ふのは君を知つてるんだよ、そして親達も知つて

るらしい『足が悪いのはどうしたんだらうかと言つてたからあれは何時ぞや友達同志から朋上げされてやんや騒ぎの最中二階から轉がり落ちて折つたのだ』と言つたらそれで納得したやうだ。『若し生れつきのであつたら子供にまた...』と心配して居つたんだよ』

Sはさう言ふのだつた。私はそれを聞きながらSの出鱈目にも驚いたが、寧ろその話のしぶりが滑稽なので可笑しくならなかつた『いや、この足は...』

と言ひかけたが止して私は前に言つたやうな言葉を笑ひながら繰返して巧みに話を外らさうとしたのである。然しSは急に眞面目に『君、まあよく考へてみ給へ。こんな話はさう無稽とはいんだよ。こんな話がある時代が人生の花なんだからね』Sは多少しれ氣味でさう言ひ残して立去つた。その言葉が妙に私の頭を捉へたのである。かりそめにも私のやうなものを...と私は心密かにSの親切に感謝するのだつた。

### 哈爾賓まで

久保田小兒科病院 院長

久保田 經 義

#### 第一 信

一月十八日滿洲へ向け旅立ち候顧みれば大正十三年一月十八日は小生の渡鮮(千)記念日に御座候、一昔を過ぎた今年の一月十八日は渡滿(萬)記念日にて、やがてはシベリヤの奥(億)まで進むならんと打興しつゝ、毛皮の外套に防寒帽子、北極探險よろしく風寒き北滿の地へ向ひ候。

安東縣の宿につき名所の一つになつて居る鴨綠江の鐵橋は何時頃開きますかと聞けば今は結氷中で開きませんとの女中の答へ。

言はれて見れば成程間の抜けたことを聞ふたものにて可笑しくなり申候、これも旅行常識の一つとして心得置くべきことと感し申候

#### 第二 信

長春からハルビン迄 ロシヤの汽車にてロシヤ人の車掌兼旅客案内者らしきと、支那人のボーイと乗り込み世話致し居り候、其車掌さん自身があとでノコノコ出て来て茶は入らぬかなと云ふ處頗る面白く感ぜられ候、注文に應じて例の大きなスタカーン(硝子のコップ)に一杯紅茶を入れて持來り候、ロシヤ人は冬期例のサモワルで紅茶をわかつて大きなコップで盛んに飲むのには驚かされ候、吾々もシベリヤに行くに矢鱈に湯が飲みたくなるものに候、多分室外の寒いのに反して室内を寧ろ暑い位暖むるため乾燥するによるならんと思はれ候。

小生等は長春より夜行列車に乗り込み候、此夜の汽車には萬國寢

臺車會社の立派な寢臺車を連絡せるは氣持よく候、夜中に劍を帯びたるロシヤ人三四人車内を巡視するものあり、殊にロシヤの汽車は多く石炭を用ひず白樺などの薪を燃かため、汽車の進行中大きな火の粉の飛ぶこと恐ろしき位に候、初旅のことゝ安眠も出來ず、連れの小林君と浮世話に夜を更かす中、お互に空腹を覺え出し候故、小生交渉委員となり例の車掌君に日露會話編と首引きでここにパンは賣らぬかと尋ね申候處、無いと答ふ、空腹で困ると訴へると、其ロシヤ人一寸待て何か喰べるものがあるだらうと云ふ様子で戸棚から菓子様の固パンを探し出して紅茶と一所に持つて來てすゝめたのは嬉しく感じ候。

暫しまどろむ中、ハルビン驛の少し手前で曉の夢を破られ候、雪の降りかかつたやうに凍つた車窓を拭ひて車外を眺めた刹那、かの廣漠たるシベリヤの雪の原野、その地平線上から眞紅の朝日が昇る雄大の景色、莊麗な彩色、それが白樺の霧氷花に反映して銀色の水滴を光らす處、眠かりし眼も一度に醒め申候。

### 杏林酒仙記

吉田 莊 一

明治町耳鼻咽喉の中村さんは、一日何百名の患者で、目の廻るやうなハヤリ方、その方の大家だが、お酒の方も杏林第一の酒傑といふ評判、何でも朝三合、晝三合、晩三合の内規だが、どうして〜先生連もそんなことでは虫が納らぬらしいとは、府の加藤酒仙博士とどんなものだらう。

古 手 紙

雜 筆 書 屋 主 人

〔 88 〕

それを感じて、川俣氏に一括して進上した。思ふに先生も私をたのまないであらう。

○ 書簡文のうまかつたのは、先輩近藤泥牛氏であらう。

氏は後年岩下清周の秘書をして居た、岩下失脚ののち大阪府下池田町に隠れた。

私の有つて居る書簡のうちで、氏が下ノ關を去る時、筆を極めて下ノ關を呪つた一文は、これこそ千古の絶唱ともいふべきもので、私は客あることに、それを示して感激を分つたものである。

今、京日の河西氏の手にあると思ふ。

◆ 平南雜記帳

吉 田 莊 一

平南の元老には詞藻の人が多い。▲西崎氏、川添氏、松井氏、いづれも立派な文章の書ける人である。▲あれほどの文藻は、他の土地では鳥渡見やうたつて見ることは出来ない。▲亦た西崎氏や、松井氏は、すぐれて筆札がうまい。▲その書簡などは、鳥渡もよして棄てる譯に行かぬ。▲と言へば、例の牡丹臺下の宮川翁を思ひ出す。▲翁は二十年愚池の間に氣を養つて居る。▲簡勁蒼古の筆を有つて居る。▲この宮川翁が歎賞する故人の筆が二つある、一は中野成北知事の南洲、今一つは森殖銀の熊澤番山、この二點は翁が口を極めて推稱するものださうだ。▲亦た朝鮮美術の保護者としての富田翁を知らぬものはない、こんな風に立派な元老の揃つて居る土地が、他の何處にあるだらう。

○ 本箱の掃除を遣つて居ると、古手紙が四五十通出て來た。

いづれも十四五年前のものであるが、犬養氏のものもあれば、福本氏のものもある、その他の知友先輩のものもある。

読んで見ると、仲々おもしろいそれを貰つた當時とは亦格別の感興がないでもない。

○ 何といつても、犬養氏のは倫を絶して居る、文辭の英邁といひ、筆蹟の勁健といひ、一代の高士の風格を發露して居る。

私の有つて居るのは、概ね刀劍に關して示教をうけたもので、講義はフチ頭、目貫から小尻、胴輪、小柄に及び、精細を極めたもので、大底一間餘に及ぶ長文句である。

○ 今も尚平壤の華頂寺にかゝつて居る犬養氏の書簡は、それにもある通り私に宛てられたもので、備前勝光の長談義がしてある。

寺の扁額には不都合だといふのを、當時の住職神林周道君が「ナニ自分の部屋にかける」と、強情をいつてふん奪つて了つた。

京城南山莊の中原君からも、うまくせしめられた。

○ こんなことで、犬養氏の手紙はだん／＼減る——少し仕入の必要がある。

多いのは、日南福本先生のだ。明治三十五年頃から知を辱し大正十一年逝去せらるゝ迄、ずつと音信を交した。

○ 今日先生の手紙の一つを開くと下のやうなものがあつた。

(前略) 椋内地は韓山ほど生活に費用かゝらずと存候に付小生一都令して當分貴下を九州日報の上賓として迎へんと存候但し寒乎たる寒社の上賓に候へば社に於ての第一の上賓にて報酬四拾圓

それにて我慢せられ候はゞ筆政の地位に置度候(中略)

御都合如何や之に同意せらるゝ儀ならば今朝副社長河波荒次郎君に此意を申合め發京歸福いたさせ候間(下略)

年少で、わがまゝで、度々失職したが、そのたびに先生は私のために、優しい情を見せられた。

○ 先生は一體氣サクの人で、談話中にも洒落や即興歌を口にせられだが、書簡もその通り隨處隨境に一流の名歌を點綴し、私達をして測る可らざる機才に、隨喜せしめられた。

○ 田岡氏は、私の年少時の先生で書簡も六七通あつたが、それは私を叱るの文、はげますの文、その出世を喜ぶの文といつた風のものが一通……まことに私にとつては好紀念物だか、安東新報社長川俣氏が先生の熱烈な愛慕者なので、

編輯後記

吉田 莊 一

◎本號の原稿を締切つて了つて、印刷中に時賢さん、衣等さん、倉田さん、その他二三氏の玉稿がとどいた、残念ではあるが、どうすることもならない、四月號の紙上を飾るつもりで居る。

◎本號に三戸萬象、加藤松林兩畫伯の小品をかゝげた、印刷がうまく行くやうなら、次號には大に素人筋の作品を収集しやうと思つて居る。

◎中島氏から素人漫畫を寄せられたのはうれしい、然かも仲々うまいものである、これなら滿洲の豪傑も、一言異議の申立てやうがあるまい。

◎近來印刷工場の場合で、原稿を非常に早く廻さねばならぬ、たとへば本號の如き、去る五日(二月)から原稿を廻したやうな次第である。四月號もこれ(本號)が出ると、スグ原稿を與へねばならぬ(工場へ)それ故寄稿家はどうかこの邊御明察の上、一日も早く玉稿御裏投下さるやうに……くれぐれも御願致します。

◎篠田博士の熊本城續稿……丁度お役所が整理中で、一回だけ休載但し次號からは引つゞきお願出來ることになつて居る。

◎尙ほ次號には、大分風變りの方面からも寄稿の確約があるので、相當目先はかわることと思ふ。

◎次號は丁度花時號となり、櫻花號となる、編輯者も意匠をこらすつもりですが、各寄稿家もどうか懇つて御援助を玉けるやうに、ひたすらお願ひいたします。

永 樂 町 人 著

人 生 雜 記

(定價金參圓也) 發 賣 所 京 城 雜 筆 社

榎本法律事務所

辯護士  
法學士

榎 本 隆

京城明治町二ノ一〇五  
電話本局二八四四番

細工の御用は  
本町 徳力へ  
電本三九三九

金 白 銀 金  
地金/御用ハ  
京城明治町  
徳力本店出張所  
電本二五八八

京 城 徳

大正十四年二月廿八日印刷  
大正十四年三月一日發行  
一部定價金四十五錢

京城府和泉町一六四  
發行兼松本 武正  
編輯人前原 登久雄  
印刷所京城日報社  
京城府和泉町一六四  
發行所京城雜筆社  
電話光化門三〇六番

好紀念物だか、安東新報社長川俣氏が先生の熱烈な愛慕者なので、  
招つて居る上、川俣氏の作風は、  
るだらう。



◎ 銘 仙 と

毛 糸 ◎



京 城 本 町  
あ、ほ、や

堀 内 満 輔

電 話 本 局  
八 五 五  
九 〇 〇  
〇 六 五  
番 番 番

◎ 多 少 に 拘 ら ず 御 用 命  
の 程 を 願 ひ 上 げ ま す

官製食卓鹽

朝鮮總督府專賣局製造の本品は理想的經濟的の調味料で文化的の活に缺ぐべからざるものであります  
 總用大瓶小瓶振出瓶等數種の美しい瓶入で價格低廉です是非御使用願ひます

京城府南大門通二丁目九七

發賣元 富田商會

長電話本局三三〇九番  
 振替京城四五六八番

春向背廣服  
 同オールバ  
 レインコート

新地質續々着荷

仕立念入り價格は安い

經濟的理想の既製品頗る豊富

▲御注文に應じ特製仕候

京城 鐘路 一ノ一九

角田洋服店

電話光化門九五五番  
 振替京城一八四三番

# 新注射療法

京城府黃金町三丁目三百八番地

## 竹下療病院

### 適應症

肺結核、肺炎加答兒、氣管支加答兒

肋膜炎等呼吸器病一切

脊髓病、癱瘓、腹膜炎、子宮內膜炎、

其他腺病質性疾患

脚氣、中風等ノ豫防

京城南大門通三丁目

金銀時計  
眼鏡一式  
各國自轉車

石川時計店

電話本局三七七二番

振替京城六〇一〇番



眞にこれ我が蓄界に新紀元を劃する優秀器

蓄音器月賦販賣始

金三十五圓御拂込と

同時に現品差上ます

第二回ヨリ金六圓宛向五ヶ月

一、高音にして又如何に低

聲微妙な音色でも原音そのま

まに聞かれます

一、瑞西製一時二挺モーター入

一、演奏力兩面盤五面

一、發音管最新グリーズネットク巻上

一、品質永久絶對保證



オートホーン 號

乙號金十八圓

御拂込と同時に現品差上ます

第二回ヨリ金四圓宛向四ヶ月

◎音聲強大、使用に便利で輕

るくて嵩ばらず室内用旅行用

最適品



京城本町壹丁目  
外國貿易元  
直輸入元

セヤマ 樂器店

電話本局一四七九番 振替京城一〇七五六番

京城本町二丁目

各國時計  
眼鏡一切

商

田中時計店

主 田 中 三 郎

電話本局二五七番  
一七二九番

事務所

京本喜左門通  
朝鮮銀行前

 早川李次板店

工場

黃金町四交叉点  
電本二四七六番

# 向上靴

紳士向  
學生向  
女學生向  
各種

向上靴は彼の有名な教化事業向上會館産業部の製品  
で御座います、事業の性質から『正しき製作』と  
『正しき材料』とに依つて作られ、之に『正しき價  
格』を付して賣られて居ります、何卒御試用の上御  
批判を給はり度存じます

京城南大門通り

向上靴  
一手販賣店  
丁子屋洋服店

電話本局  
長二四六  
二二九九  
三〇九〇  
番

休日なし 毎日夜九時迄營業——御用の節は店内クツ部御呼出被下度候



浴用



朝鮮總督府  
專賣局製



一元賣販手一

堂 生 貴

目丁二町本城京  
番八六七城京製振・番八三一局本話電

子菓用應實の松産山剛金

金	金	金	金	金	金	金	金	金	金	金
剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛
ほ	で	この	う	ぼ	お	羊	煎	饅	山	飴
し	ん	の	に	ん	こ	羹	餅	頭		
	ふ	わた			し					

金剛柏子菓  
朝の實菓子

電話局本  
 番七二  
 番五七四

店商屋龜

町本城京  
 目丁二

元 賣 販 手 一  
 堂 生 貴  
 目 丁 二 町 本 城 京  
 番 八 六 七 城 京 報 振 • 番 八 三 一 局 本 話 電

浴 用  
 精 參  
 府 督 總 鮮 朝  
 製 司 專 專



子菓用應實の松産山剛金

金	金	金	金	金	金	金	金	金	金	金
剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛	剛
ほ	で	この	う	ぼ	柏	お	羊	煎	饅	山
し	ん	の	に	ん	子	こ	羹	餅	頭	飴
	ふ	わた			菓	し				

電話局本  
番七二  
番五七四

店商屋龜

町本城京  
目丁二



# 三井吳服店 株式會社

世相の遷り變りは暗黙の裡に服業界にも大なる動きをなして居るものであります。思想の動搖は流行りまして生活相の變遷な

## 新柄本セル品揃

生活は今後彌々複雑化するでありませう。而して本セルの輕快さは茲に彌々珍重されるのであります。趣味と實益を本領とする優秀品を皆様の前に御覧に入れべく努む立つたものが三井特選の本セルであります。柄の創作擧定に本尺の改良に一一々精細なる注意を拂つた逸品であります。値の上にも吟味した周到振であります。

## 新柄英セル品揃

三井の英セル…質のよい柄の優俊なと名實とも斯界の第一人者たることが確認されて居ります。お可愛い均ちゃん、變さんに是非召して戴きたい特別な柄…更に心持のよい爽やかな地質……どうぞ御買上の程を願

上ます

